
うりと夏休み～続編～

ぬこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うりと夏休み〜続編〜

【Nコード】

N1687B

【作者名】

ぬこ

【あらすじ】

22歳成人男性フリーター隼人と、蔵の中で見つけた、うり。育ててくれた（家においてくれた）親戚と、ジイちゃんの屋敷や、隼人に残された財産のこと。今まで、いつか20になったら幸せになれるって信じていた未来が夢でしかなかったら。このまま、ここにいたいっていう願いも叶える事ができなかつたら。隼人と、うりと。季節は夏から秋になり、そんな日常のお話です。

あいもかわらず

あいも変わらず朝にはセミが鳴いて、夕方にはカエルの声がして。

俺の隣には、うりが居て。

幸せだっと思いつながら、色々考える事もあったりして。

でも、もちろん、うりがいてくれるのは嬉しいし、なにより、いなくなったら、絶対嫌だ。

あれやこれや、悩んで、気になって。セ

でも、縁側でバアちゃんからもらったお手玉を頭に載せたり、あやしげな歌を歌って並べるのを見て、幸せだから、考える余裕があるのかななんて、ちよつと大人になった気分になってみたり。

「んーうつ、つれしいがー」

どっかできいたことあるような、ないような。

思い出せないことって、一回気になりだすとダメなんだよなー・・

歌にあわせて、お手玉を頭に載せている。

そうか、お手玉って、積み上げていく高さを競うもんなのか。

「うり、それ、なんの歌だ？」

「いかなの。」

「いかなの？」

「いかなのあながあいていうの。」

「・・・いかなのう、穴が開いている・・・？バアちゃんに何教わったんだ？」

穴が開いている・・・。

靴下か？

パンツか？

うりを持ち上げて、あちこちみてるが、どこにも破けた跡はない。

「いーかんーのあーながーあああいてーいうー」

・・・今日、バアちゃんに聞いてみよう・・・。

「ほーら、うり、坂道だぞー？」

「おおおおおー！」

「いくぞー！」

ママチャリの後にうりに乗せて、坂道を下る。

できればカゴにのせたいよなーなんて思ってみたりしたけど、うん、悪くないっ！

バアちゃん家までおかげでかなり近くなった。

自転車サマサマだなっ。

いつもの橋を渡って、見えてくるのはバアちゃん家。

今日のお土産は、ナス。

なかなかでかいやつがなってたから、もってきたのだ。

自転車で、庭を抜ける。

ニワトリーズが草を食べているのを見てか、うりが、

「こっこっこっこっこっ？」

「ん？」

「けー！」

・・・威嚇してんのか、会話試みてるのか？

「あ、ミヨコさん！こんにちわー！」

「あー！」

畑にしゃがみこんで草むしりをしている、後姿。

大きな声で声をかけると、立ち上がって手を振ってくれる。

「よくきたねえー、バアちゃん縁側にいるからねー！」

そついうと、よいしょと腰を伸ばすミヨコさん。

「ありがとうございますー！」

「しゅー！」

チリンチリン、とベルを鳴らして、縁側まで走る。

「おお、よく来たねえー、まっけたよう。」

「バアちゃん、これ、お土産っ！」

「なし！」

「ちがう、なす、だっ！」

「う！」

うりが、しっかりと抱えていたナスをバアちゃんに渡す。

「ありがとねえ、うりちゃん。」

わらしさま、と呼んでいたバアちゃん。

今は、バアちゃんのほうがずっと年を取って、それでも、うりはちいちゃくて。

目が覚めたうりに、わらしさま、と声を掛けたバアちゃん。

「うり、バアちゃんだよ。色々うまいものもらったろ？」

「あーちゃ？」

にこーっとわらって、バアちゃんにぎゅうーっと抱きついた、うり。

バアちゃんが、バアちゃんじゃなくて、もっともっとちっちゃかったところ。

そのことをうりが覚えているか、いないかは、わからない。

その頃の事から、紹介したほうがよかったのか、これでいいのか。

でも、俺がしってるのは、うりで。

おかえり、って言って、ただいまって帰ってきたのは、うりで。

きつと、いっぱい、いっぱい、混乱するんだろうな、なんて思ってた。

でも。

「うりちゃん、よかったねえー？」
「あいっ」

って、バアちゃんは、うりの頭を撫でた。

できることなら、どこにもいかないでくれよなっ？

「瑠璃様も、わらしさまも、ちゃんと、おうちにかえたんだねえ。」

「え？」

「人は何回でも生まれ変わるっていうのよう。」

問いかけた俺に、バアちゃんは笑って。

「人が生まれ変わるんだから、瑠璃様もわらしさまも、ちゃんと生まれ変わってるのよう。」

「んつと……。難しいや。」

「いいのよう。バアちゃんはそれでいいのよう。」

「実は俺もまだ、よくわかってなかったりするけど……。」

うん、実は、そうだ。

たまにふとしたときに、このまま一緒にいられるのかなとか、考えちゃって。

夏の匂いがどんどん夕方になると秋の匂いになってるのをかいだ時とか。

朝、目が覚めて、太陽が眩しくなかったりとか。

通りに咲いてる向日葵が、種をつけて、茶色くなっているのを見るときとか。

きつと、大丈夫って、何となく思っで、今も居るけど。
実は、不安なのはやっぱりあるわけで。

今わかっているのは、うりが、わらしさま、で、瑠璃様。
きつと、わらしさまも、うりも、冬を経験したことはなくて。
昔、バアちゃんやジイちゃんと遊んでいた事があつて。

まだ、村の人、会った事ある人や、話したことある人は少ないか
らわからないけど、他の人はどうなんだろうとか。

それから、いつこ。

もし。

もし・・・。

いや、やめておこう。
思うだけで、口にするだけでも、「今」が台無しになりそうで、
怖い。

人間って、多分、妙な生き物なんだろうって、思う。

うりが帰ってきてくれて、嬉しくてたまらなくて。
散々泣いて、ばやけた頭が、次第に考え付いたのは、これからの
ことで。

今のところ、うり、がみえるのは、バアちゃんと、ミヨコさんと。
(ジイちゃんにはあつてないからわかんないけど。)

ああ、ニワトリーズはもちろんそうなんだけど、他はどうなんだろ。

ミヨコさんは、隣村からお嫁さんにきたらしくて、瑠璃様のこととかはしらなくて。

やっぱり、最初は見えてはいなかったんだ、っていつてた。
ただ、なんとなく、時々、あれ？って。

見えるわけじゃないけど、なんだか、感じるような。

だから、持たせてくれたかぼちゃとか、うまいものは、二人で分けて丁度いい位の量。

あれ？って思ったりはするけど、気にはしてなかったみたいで。
俺と、バアちゃんが話して、ミヨコさんに説明したら、「ああ！
なんて笑ってた。

それで、ミヨコさん。

「うりちゃん、麦茶のみなあー？お砂糖はいつてるねえ？」

なんて、砂糖入りの麦茶をうりに勧めて。

きよとん、とみていたうりが、嬉しそうににこーっと笑って、麦茶を受け取ったんだ。

「ニイちゃん、気にしたってしょうがないよう？」

バアちゃんが笑って俺の肩を撫でる。

「うん、そうだよな。」

俺も、そう思う。

今、ここに居てくれて、このあいだ、うりは「ただいま。」って

(実際はそう流暢に言ってたわけじゃないけど。) 言って。

そんで、俺と一緒にいるんだ。

すくなくとも、今は一緒にいる。

もし、またいつか。

うりがどこかに行ってしまったら、俺は、またうりを待つ。

うまい飯を準備して。

そして、おかえりって言ってやるんだ。

でも。

・・・できるなら二度とどこにもいかないでくれよなっ？

願わくば。

「あ、ミヨコさん、俺手伝いますよ。」

「あらー、おニイちゃん、ありがとねえー?」

大きなカゴを背負うミヨコさんに声を掛ける。

いつもいろいろもらってばっかなんだし、たまには手伝わないと
っ!

変わりにカゴを背負うと、畑にむかう。

「じゃあ、うりちゃん、バアちゃんと遊ぼうねえ?」

「あいつ!」

「それじゃ、こないだの続きやろうねえ。」

「いーかんーのあーながー」

あ。

「ばあちゃんっ!」

「うん?」

「それ、なに?」

ミヨコさんが、笑う。

「いかなのう、穴が開いている、って?」

「ぶはっ!」

あ、バアちゃん麦茶噴出した。

「えっ!？」

「あらやだぁー、おニイちゃんったらっ!」

ミヨコさんまで、俺の肩をバシバシ叩きながら大爆笑。

え、え、え?

もしかして、俺の靴下に穴!?

・・・いや、そもそも靴下はいてない。

・・・パンツ!?

「ニイちゃん、ようつく聞いててなぁ?」

バアちゃんが笑いながらお手玉を二つ、手に取る。

「みいいーかんーのはぁーながーさぁいてーいるー。」

・・・。

「うつ・・・。」

えー、マジで、かなり、恥ずかしいですっ!!!!

それから、しばらく笑い転げているミヨコさんと、バアちゃんと、釣られて笑う、うりの笑いが引くまで、俺は「あー。」とか、「いや、ほら。」とか言ってみたりして。

ま、まあ、笑ってもらえたなら、いっか？

なんて照れ笑いするのみて、又笑うもんだから、なあ？

「いやあ、ほんとに面白かったわああ、おニイちゃん、今日のお土産弾むからねえ？」

「ミヨコさん、またスイカいっこもたせてやりなあ。」

涙拭きながら、バアちゃんとミヨコさん。

「うっわ！嬉しいっす！・・・笑ってもらえた甲斐がありますっ！」

「ぷっつてすう！」

「おー、今度はうまく飛ばせるようになろうなー？」

「あいっ！」

口を尖らせて、すいかの種を飛ばす真似をする、うり。その唇をにゅーっとつまんで、ふにふに。

「こらっ、よだれっ！」

「だっ！」

想像だけでここまで涎とは、恐るべし、うりっ。

「んじゃ、ミヨコさん、いきますかっ！」

「手伝ってくれるの、ほんとたすかるわあー？」

秋になったら、栗拾いがあるらしい。
もちろん、初体験だ。

バアちゃんによると、あのイガが当たると半端なく痛いらしいから、長袖で、分厚い服きて、それで、長靴はいて足で踏んで、割るようにして中の実をだすんだそう。

・・・絶対うりが大喜びだろうな。
とかいいつつ、俺も楽しみだったりする。

うん、また食べ方おそわらねーとなっ。

「おニイちゃん、これつかいなー？」

「あ、すみませんっ。」

そういつて、ハサミを渡してくれるミヨコさん。

やっべ、マジいい匂い。

桃が木になつてゐるのを見るのは、実は初めて。

よく、店とかでパックに入つて、押しちやいけないんだけど押しなくなるもんなんだよな。

しかし、こうやって収穫みてると、悪かったなー、って反省。

「ほんと、いろんなもの作ってるんですねー？」

「そうよー、なんでもあるよー、ほら、いっこたべてみなあ？」

「やったっ！」

もぎたての桃を一つもらっ。

うりにも食わせてやりたいな、なんて思ってた。

「大丈夫よう、うりちゃんの分もあるからねえ？」

「あ、すみませんっ！」

笑って、カゴを見せてくれるミヨコさん。
指先で皮をつまんで、つぴーっ、とむく。
うん、やばい。

「ほんつといい匂い・・・。」

「うんまいから、がぶつと食べてごらん？」

「いただきますっ！」

じゅるっ。

口とか、鼻とか、いい匂いと甘い幸せで満たされてっ！

「硬い桃って、初めてです！マジでうまい！」

「でしょお？」

そういつて嬉しそうに桃にかぶりつくミヨコさん。

これ、種もらっていつて植えたら、来年辺り食えるかなー、なんて思ってみたり。

思わずじつと種をみると。

「おニイちゃん、桃栗三年、柿八年ていつのよう？」
「えっ？」

「すぐに実はならないわよう？毎年ウチに食べにきなあ？」

「そ、そうなんですかつ？マジで食べに来ますっ！」

三年、か。

その頃、俺とつりはどうしてるかなー、なんて、ふと試してみたりする。

・・・想像つかないな。

願わくば、いつまでも今のままで居られたら、いいなっ。

「ごっさまえった！」

「せせせーのよいよいよー」

「はい、せっせっせーのよいよいいっ。」

二人、向き合って手を握り、何やら歌いながら指を動かしている、バアちゃんと、うり。

「ただいまー、うり、桃もらったぞっ。」

「おも？」

「もーもっ！」

「もーもー！」

バアちゃんの指をにぎったまま、にこーっと笑っ、うり。

「うし？」

「いや、違っっ！」

「ニイちゃん、ミヨコさん、お疲れさんだねえ。麦茶冷えてるよ
う。」

バアちゃんがコップに麦茶を注いでくれる（のを手伝っうり。）。
カゴを降ろして、ミヨコさんとはあちゃんと、俺とうりとで縁側
に座って、一息入れる。

「今日は、何教えてもらっただんだ？」

「あやとに！」

「俺かつ！？」

「あやとり、だよう。」

「あら、懐かしいねええ？」

うりが、ポケットから、毛糸の紐を出す。

「お、見せてくれるのか？」

「あいっ！」

毛糸を指にかける、うり。

いや、違うな。

毛糸の輪っかの中に両手を入れて……。

「あい！」

ぱつと開く。

・・・手錠？

「うしししっ！」

「おー、うり、・・・それはなんだ？」

「あなっ！」

「あなっ！？」

ミヨコさんが、ぶつと吹き出して、ケラケラ大声で笑う。
バアちゃんも笑いながら、

「うりちゃん、穴上手にできたねえ？」

「あいっ！」

バ、バアちゃん、それでいいのかつ！

「それじゃあ、明日にでも今度はおニいちゃんとうりちゃんとミヨちゃんとバアちゃんであくれ鬼しようかあ？」

ミヨコさんがそういつて、カゴに隠れる振りをする。

「おおお！」

ガキの頃とか、こうやって遊んだ思い出つて、俺、ほんとになかったなあ、なんて思つて。

ババアん家に引き取られてからは、遊びに行つて、帰るとか、なかつたんだよな。

大抵、まっすぐ帰つて、掃除して。

タクが帰つてくるまでには風呂沸かして。

ほんと、今更、つてやつかもだけど、

「それじゃあ、明日にでも今度はおニいちゃんとうりちゃんと、ミヨちゃんとバアちゃんであくれ鬼しようかあ？」

つていつミヨコさんの言葉にひそかにわくわくしちゃつてたりする、俺。

ほんのり風が涼しくなつて、虫の声が聞こえ始める。

もう少ししたら、一番星が見える頃だろうか。

「ん、そろそろかえろっか、うり。」

「あいっ!」

縁側であれこれ話しをしたり、スイカをご馳走になったり。
明日もバアちゃん家に遊びに来る約束をして、立ち上がると。

「おニイちゃん、これもってきなあ?」

「あ!」

「おにぎりにしてあるからねえ、帰ってたべるんだよう?」

台所から慌てて呼び止める、ミヨコさん。

もたせてくれるのは、おにぎりと、ナスをいためたものと、スイ
カと桃。

「毎回ほんと、たくさん頂いちゃってすいませんっ。」

「いいのよー、手伝ってもらってこつちも助かるんだからねえ?」

「そうよう、またうりちゃん、ニイちゃん、おいでねえ。」

「助かりますっ!ほんと、ごちそうさまでした!」

頭を下げる。

それをみて続ける、うり。

「ごっさまえった!」

・・・うり、今舌かんだろ?

もも

「大分涼しくなったなー？」

「あー？」

ほんの一週間でこんなに温度、変わるもんなんだなあ、なんて。前はもうちよつと遅い時間まで日が伸びてて、まだまだ暑くて。

「うり、今日はちよつとゆっくり風呂つかろうなー、そろそろ40かぞえよつか。」

「あい！」

「さんじゅー、の次は？」

「よんじゅっ！」

「ま、まあ数え方によっちゃあってなくはないんだがっ……？」

「あ、あー……うん、数えてみよう……。んじゃ、二十五、二十六……。」

「にじゅひち！」

「お、えらいっ！そんじゃ、二十八っ！」

「にじゅく！」

「三十っ！」

「よんじゅっっ！」

まてっ！

それじゃ「ちよつとゆっくり」じゃなくて一瞬だろうっ！

「よし、うり。すごくいい事をおしえてやるぞー？」
「あにつ！？」

「三十の次は、三十一なんだ。」

「えええ！」

「さらに・・・。」

今にもツバをのみこみそうな真剣な顔で俺を見るうり。

「三十一の次は三十二なんだ・・・。」

「ええええ！」

「ここまで言ったら、うりは、わかるよな・・・？」

「あいつ！」

「三十二の次は・・・？」

「はんじゅはん！」

思い切り驚いた顔をしてみせる。

びくつとして、拳を握り締め、じいじいと俺を見る。

「・・・うり・・・。」

「・・・あいつ・・・！」

「正解っ！えらいぞうっ！」

「おおおおお！」

ふと、某クイズ番組が頭をよぎったわけですが。

残念ながら賞金はありませんっ！

キキツ、と音を立てて自転車を庭に止める。
あ、俺蚊にさされてるな、かゆい。

「うり、蚊にさされてないか？」

「う？」

「痒くない？」

自転車から抱き上げて降ろしてやる、が、刺された跡はないみたいだ。

うん、やっぱり自転車っていいなー。

風切って走るのも気持ちいいし、なにより、荷物持つのがかなり楽だ。

まあ、うりが一人じゃ乗り降りできないんで、その辺は手伝ってやらないといけないわけだが、これが、なんか楽しい。

「自転車、やっぱりいいなー。」

「うー」

カゴからお土産を降ろす。

おにぎりもらったから、今夜は飯炊かないでいいかな。

ナス炒めたのもあるから、それおかずにして、デザートに桃、明日の朝はスイカだなっ！

「よし、うり。」

「う？」

「ほーら、かいでーらん？」

「あいっ！」

うりの鼻先に桃を近づける。

「う！」

ぴくつとして、口を開ける。
それを、すつと上に上げる。

「あ！」

飛び上がるうり・・・が、届かないつ。

「ほーら、いい匂いしただろ？これが、桃だ！」

「もー！」

「飯食ったら、デザートにしようなっ？」

「あーう」

うん、返事してるのか？それとも、今くいたってねだってるのか？

あーん、の口でじつと俺を見る、うり。

「うりー、晩飯食ったら、桃にしようなー？」

「あーう」

「うりー、口開いてるぞー？」

「あー」

・・・あー、口全開だぞっ？

「よ、よし、いつこだけな？」

「あいっ」

結局、口を開いてるうりに勝てず、桃をむく。

てか、俺も待てなかったりしたのは秘密の話だっ！

獲り立ての桃、これ、包丁無くてもむけるんだな。

そんなに簡単にむける訳じゃないけど、硬いから爪でぴーっと。

うん、いい匂いだっ。

「やとっ！あやとっ！」

「はいはい、ほら、あーん。」

ぱかーっと口を開いてるうりに、桃を一つ手渡してやる。

一口大に切ってやろうかー、と思ったんだけど、やっぱ、丸ごと
だろっ？

「おおおお！」

「よーし、いただきますっ！」

庭にそのまま皮を捨てて、二人で自転車に座って桃を食う。

「じゅっ・・・ぶじゅっ。」

「うめっ！」

汁気が多いもんで手がベトベト。

当然、隣のうりは顔までベトベトなわけで。

「うり、うまいか？」

「うまあああ！」

「顔、ベトベトだぞ？」

「うしししっ！」

「いや、ほめてないっ！」

「う？」

拭ってやるうかと思ったが、俺の手もベトベト。

「あやと、ももー。」

「ん？いっただけだぞー？」

「あやと、うー。」

「ん？」

あ、俺の顔にも桃がついてたのか。

うりが手を伸ばして取るうとして気付く。

・・・って、22にもなって俺ってばっ！

うん。

「よーっし、ただいまっ！」

「あじゃいまっ！」

「おかえりっ！」

「おじゃえりー！」

あれから恒例になった、二人の挨拶。

必ず、二人でただいまっていったら、二人でお互いにおかえりつて言う。

同時に家に入るから、挨拶も同時なんだけど、やっぱり嬉しいもんだ。

「んじゃ、今日はバアちゃん家でもらったおにぎりと、おかずでいつかつ！」

「いか！」

「んじゃ、それ食ったら風呂入ろうなー？」

「あいっ！」

荷物を居間に下ろして、ランプをつける。

これから寒くなるし、電気通したほうがいいかな？

まあ、囲炉裏があるみたいだから、これは後でバアちゃんに教わるとして、電気はついた方がいいかもしれないよな。

あれから、数日たった今。

まだ、ババアもタクも、顔を見せてない。

見たい顔じゃないからいい、といえば気楽かもしれないが、ほんとにこのまま、何事も無くいられるか、不安は残るわけで。

銀行にいつて、口座確認もしないといけないんだけど、・・・振り込まれてる気がしない。

こっちから出向いた方がいいのかとか、色々考えるけど。タクが結婚するから、ここを取り壊してタクの家に。

結婚おめでとう、とは思えるけど、祝いにここを手放す程、心は広くないらしい、俺。

うん、心、狭いよな。

わかってる。

すごい、わかってる。

でも、嫌なんだ。

初めての、「居場所」に固執したくなる、守りたくなる、ワガママだろうけど、どうしても、手放したくない。

正直、申し訳ないけど、こうして生きてるって実感して、毎日笑って、幸せだっと思って。

それをずっと俺の物にできるなら、寿命が半分なったって、いや、1/3になったっていいとさえ、思う。

うりが、これからどうなるのか、俺だけ年を取るのか、とか、考え始めたらキリがない。

でも、風が秋っぽくなつて、これから冬が来て。

一緒にカマクラ作りたいとか、クリスマスにケーキを食べたり、大晦日にソバ食って、新年に雑煮作って（作り方わからねえけど）、そつという事を考えたら、楽しみで、楽しみで。

どうしようもないくらい、これからの未来が、楽しみで。

だから、早めに決着つけないと、とか、決着つけるから、ちょっと休憩して、とか、思っちゃったりしてる。

ちゃんとやるから、願ひ叶えて、って、俺言つたのにな。

すぐにこうやって弱気になる、自分が情けないと思う。

きっと、この生活は本当に俺のものだ、って実感できるまで、ずつと考える。

でも、実感できたら今度はまた、あれこれ考えて、ぐるぐるするんだろうか。

こんな自分じゃいけないよなつて、何回も思つて。

昔、ガキの頃はそんなこと思つたことも無かつた。

一人でいるのが、当然だったし、何人かいて感じる孤独のほうが辛かつた。

仕方ない、いつか、いつかきつと、って。

ぎゅうつと、手を握られる。

「うり。」

「いたい？」

「いや、大丈夫だよ、ありがとなっ。」

うん。

一人じゃない。

握った手のひんやりした感触。

でも、一人で寝ていた冷たい布団より、ずっと、ずっとあったかくて。

——それが、今は幸せだって思うから、それを守りたくて、失う事が怖くて弱虫になっているんだろうか。

「いろいろ考えて、大人になるんだ。」

「年とる？」

「ただ、年をとるんじゃないんだ。心が、な。」

「一杯勉強して？」

「それももちろん大事だ、でもな、隼人。」

「ん？」

「これからお前に訪れる出来事が幸せであつても、辛いことであっても、成長できる人間になるんだぞ。」

「辛いのは、嫌だな・・・。」

「幸せも、辛いも、いつだって同じところにあるんだよ。」

うん、ジイちゃん。

今になって、俺、成長できてるってことなのかな。

もっと、もっとジイちゃんと話したかったな。

「あやと?」

「ん、あ、ごめん。風呂沸いたかな?」

「うー?」

「大丈夫だよ、うり、ありがとな。」

「あう。」

今まで、言う事無かった、言うことも無いと思った、言葉。

「心配かけて、ごめんな。ありがと。」

が、うりの手を握って、丸い目を見てたら、すんなりと出てきた。

「あいつ」

「よしっ!それじゃっ!」

「う?」

「風呂いくぞー!」

「おおおお!」

庭にかきこおり

「つかー、やっぱり風呂はいいなっ！」

「っじゃー！っばふおあいいなっ！」

似てる似てるっ！

俺の真似をして、風呂に浸かって、一言。

うん、やっぱり風呂は最高だ。

虫の声聞きながら、星を眺めて、風呂に浸かって、手足を伸ばす。

うりの頭を洗ってやるのも大分上達して、今じゃ頭洗いプロだな。もう、洗いながら上を向かせることもないし、洗ってやってる時のうりの気持ちよさそうな様子とかからして、この道でやってけるんじゃないかって位だ。

「おおーきなおーぽのうるとけいー」

「お、また歌教わったのか？」

「あいっ！」

「あとっ、あとっ！」

「ん？」

風呂に浸かりながら手をばちやばちやふる、うり。

「いーんせーいまーくーあーにやーうーもあーうーさー」

・・・音程から察するに、もしやどこぞの將軍サマの・・・？

「うり、それは？」

「あっちゃん」

「バアちゃんに教わったのか？」

「あいっ！」

得意げに手を上げる、がつ。

「うり、続きしってる？」

「う？」

「その歌の続き。」

「おーしおーしかーめよ？」

「うーん、ちよつと違うっ！」

「あだー。」

日ごとにレパートリーが増えてく、うりの歌だが、いつこ覚える
と、どうやらいつこ混じるか抜けるかしてるらしい。

「よーっし、そんじゃ大分あつたまつたから、数数えてでるぞー

？」

「あいっ！」

「いーち、にーい。」

「はーんっ！」

「しーい。」

「ごっ！」

流石に、夜にもなると、秋の訪れってヤツを感じる。

風呂上りの風がひんやりして、すっかりあつたまつた体に心地よ

い。

「うりー、もうちょっと寒くなったら、どうしようかー？」
「う？」

「寒くなったら、ストーブでも入れるか？」

首をかしげる、うり。

そっか、うりは冬を知らないのかもしれない。

「よし、これから毎日がもしかしたらうりの初めて記念日だな。」
「けき？」

「おー、いいな、記念日なるならケーキくったりするか！」
「うりけきすきいいい！」

「これから、どんどん寒くなって、もっともつとしたら、雪がふるからなー？」

「ゆき？」

んー、雪、雨になる水分が凍って、でいいんだっけ。
なんて説明したらいいかなー・・・？

あ。

「空からカキ氷が降ってくると思えばいいぞっ！」
「……………」

うつわ、うり、目まんまるだぞっ！

・・・って、そんな嬉しそうな顔して・・・。

うん、間違ってないよな？

雪が積もったところとか、カキ氷・・・だよな・・・？

「それが、ちょこつとずつ降ってくるから、じーっとまって、いっぱい積もったら、地面一面キレイだぞー？真っ白でな？」

「いちご？」

うり、口半開きっ！

「ん、んー・・・イチゴシロップかっておけば、まあ、イチゴ・・・かな？」

「あじゆき？」

「小豆か！茹でて、庭に撒いて・・・いや、雪を器に乗せる方がいいなっ。」

想像してみる。

庭一面に撒き散らした小豆。

・・・シユール、っていえないこともな・・・いわけないよなっ。どんぐらい雪が降るのかわからねえけど、冬は冬の楽しみがあるな。

「ゆきっ！すき！」

「その代わり、寒くて体冷えるから、あつたかくしてないとな？」

「あたかーくしてたあ、雪いーい？」

「だなっ。」

にゃーん

「あやとつ。」

「ん？」

「にあー。」

「んっ？」

「にあーって、いうっ？」

「誰が？」

首をかしげる、うり。

にあーって、いう・・・？

「にゃー。」

「どうした？」

居間から、廊下へ走るうり。

「にゃー。」

「うり？」

「にゃー？」

「いや、俺が聞きたいっ！」

ガラッと網戸を開ける・・・と。

「ん。」

何かが、さっと隠れるのが見える。

じーっと、動かないで様子を伺ってみると。

「あ！」

「猫かつ？」

一瞬、小さな姿が見える。

ここまではランプの光が届かないから、月明かり。
その、柔らかい光に微かに照らされた、白い毛。

「うり、じーっとしててみ？」

「あいっ！」

いや、指差したままでじっとしなくていいぞっ？

うりの手を戻してやり、後ろから抱えるようにして、じっと外を見る。

キキキキ。

時折、小さく虫の声。

にゃーん。

「ー！」

「うり、しーっ。」

びくっとするうりに小声でいうと、こくこくこくっつと物凄い勢いで首を振る。

そろりそろり、と出てきたのは、小さな三毛猫。

月を背にして歩いてくる、その小さな影が長く伸びている。

「うり、牛乳あつたよな？」

こくこくっ！と、勢いよく首を振る。

うん、静かにしてるんだよな？

でも、鼻息すげーぞっ？

そして、台所からうりの牛乳を持ってきて、平たい器に少し入れて。

確か、人間用の牛乳って、動物だと腹下す事もあるって聞いたんだけど、それ以外に猫が食いそうなもんがなくて。

見るからに子猫だろうし、多分コレでいいんじゃないかと思って、器をそつと縁側の下に置く。

じーっと、俺とうりを見る、子猫。

そして、その子猫をじつと見て、鼻息荒い、うり。

「うり、ちょっと奥行ってみよ？」

「？」

首を上げて俺の顔を見上げる。

「ほら、子猫だし、きつと怖がつてるんだろ。ちょっと離れて、牛乳飲ませてやって、しばらくそうしてるうちに慣れてくれると思うからさ。」

「こねこ?」

「うんうん。あれは、猫。ちっちゃいから、子猫。」

「ねこ。」

「そう、猫さんな?」

「ねこちゃん。」

「よしよし、そんじゃちょっと奥行こうな?」

うりを抱きかかえて、二、三步下がる。

そーっと様子を見ていると、そろり、そろり、と近寄ってくる、
猫。

ちよっと近づいては、じーっとこっちをみて、しばらく立ち止まり、また一歩。

りーん、りーん。

雲ひとつ無い、星空。

月明かりと、猫と、虫の声。

ゆらゆら、揺れる細いしっぽ。

それが、ゆっくりと近づいてきて、縁台の下に、そーっと。

「!」

「うり、しーっ。そーっとみてみ?」

こくこくっ、と頷いて、そーっと身を乗り出す。

。どんな顔してる猫なんだろうー、なんて、俺も一緒にそーっと・・・

がっ。

雲ひとつ無い、月明かりの綺麗な夜。

俺の体の影で遮られた月明かりに異変を感じたのか、びくっとして逃げる猫。

「あー。」

「うり、ごめんっ！」

とはいえ、遠くまでは逃げない。

手は届かないけど、じっくり姿を見れる距離だ。

柔らかそうな毛並みに、夜だからか、まんまるい目。

「ねこしゃーん。」

「ほら、おいで。」

「えっこしゃーん。」

うり、ちょっとずつ違ってきてる。

「ほら、何もしねえって、可愛い顔見せてくれって。」

「うりにも！」

にゃーん。

子猫独特の、甲高い声ではなくて、鳴きすぎたのか、若干嘎れた声。

親猫とはぐれたのか、細い体で精一杯虚勢を張る姿。
しかし、腹が減って、寂しくて。

そんな声で、絶えず、鳴く、子猫。

にゃーん。にゃーん。にゃーん。

ここにいるよ、どこにいるの、どこにいるの。

にゃーん。

ここにいるよ。

聞いているだけで、なんだか寂しくなる、ひっきりなしに鳴く、猫
の声。

どうしても、言葉で聞こえるような気がして。

怖い、腹が減った、寂しい、不安、心細い。

小さな体で、大きな声を必死で出しているようで。

「うり。」

「う？」

「猫さん、俺たちいたら、怖くて牛乳飲めないかもしれないから、
居間戻ろう。」

「こあい？」

じーっと、俺を見つめる、うり。
そして、自分の手を、握ったり開いたりして、もう一度、猫を見る。

「きっと、迷子になったのかもしれないし、腹減ってるだろうか、安心しておなか一杯にさせてやる？」

「ぐうーって？」

「うん、うりも腹減ったらぐーってなるだろ？」

「あい！」

こくつと頷いて、俺に手を伸ばす。

「よし、いいこだなー。肩車して連れてってやるからなー？」

「あーいつ」

「明日、また猫さんきてくれるといいな。」

「う！」

うりを抱き上げてやる。

と。

「ねこしゃーん、あたね？」

「またな。」

くるつと振り返り、猫に手を振る、うり。

明日も来るかな。

それなら、何か猫が食うもの準備しておいてやろうかな。

どんぶらっつーと。

魚・・・だっけ？

肉か魚だと思っただが、そういえばあんまり俺も食ってない。

明日、午前中にバアちゃんといって、帰りに買い物してこようかな。

キヤットフードとか売ってたらそれかってきてもいいし。

んー・・・やっぱ、冷蔵庫とかは必要だなあ・・・。

「うりー。」

「う？」

「後でまた、ババアんとこ行って、そして冷蔵庫とか買おうな？」

「えーぞこ？」

「そそ、冷たいままとっておけるから、便利だぞ？」

う？と首をかしげる。

うん、想像つきにくいだろっなー・・・。

まあ、この間の話の続きもしないといけないし、今後の事もあるし、絶対行かないといけないのはわかってる。

前に比べて、気持ちが穏やかなのは、諦めがついたから、とかじゃない。

なんていうか、気持ちが座ったっていうか、気合が入ったって言うのかな。

「ここ譲るつもりも、遺産の事とかも、あきらめるつもりなんてないし、出来るなら穏やかにしておきたいのは、変わらない。」

「むこうの部屋もそのままにはしておけないし、今回はうりはバアちゃんどこにいてもらうしか、ないよな。」

「よし、うり、そろそろねるか!」

「あいっ!」

あ。

そういえば。

「ニイちゃん、ホラ、これやるからねえ。」

「ん?」

「寝る前に読んであげるんだよう?」

「バアちゃんが、帰り際にくれたのは、絵本。」

「タイトルは、・・・桃太郎。」

「うり。」

「う?」

「いい子で寝るから、本よんでやるぞー?」

「ほん?」

「くりつと、首をかしげる、うり。」

「本っていうのは・・・えーと。・・・オハナシだ。」

「おはあし？」

「そうだ。おもしろいぞ？」

「おおおお！」

おお、喜んでるぞっ？

「ちなみに、食い物じゃねえぞ？」

「あう。」

・・・ま、まあ、布団いくかつ。

「昔々、あるところに、じいさんとばあちゃんがいました。」

「どこっ？」

寝転がって、絵本を読む・・・なんて、初めてだっ！

この場合、ジイちゃんとバアちゃんは、どこにすんでるんだ・・・？

「えー、んつとな、・・・その、遠くだ。」

うん、あってるよなっ？

「それでな、バアちゃんは、川へ洗濯に、ジイちゃんは、山へ芝刈りに行きました。」

「う？」

・・・なんで、芝刈り？

首をかしげるうりにつられて、ふと思いつく、俺。

「なんで、芝刈りなんだろなー？」

「うー？」

「ま、まあいいかつ！それで、バアちゃんが洗濯をしていると、川から大きな桃が。」

「ももっ！」

「うん、桃だなー・・・。」

川から桃・・・どんだけすごい光景なんだっ？
いや、続きだ！

「そんで、バアちゃんは、桃を持ち帰りました。」

「う。」

「そして、うちに帰ってジイちゃんと食べようと、桃をきってみると！」

「と！」

「中には男の子が！」

「ええええっ！」

驚いて目を丸くする、うり。

「二人は、その子を桃太郎と名づけました。」

「ももたお、たべちゃたー？」

「いやいやいやいやっ、まてっ！」

どこの世界にそんな恐ろしい日本昔話がつ！

「かあいそねー？」

「いや、大丈夫っ！」

「う？」

「桃太郎は、でてきて、無事に育ったんでした。」

「ももはっ？」

「んー、そりゃ、余った部分は食ったんじゃないかな？」

「んま？」

「うん、sonでかい桃なら、くい応えあるだろうなー。」

確かに、桃太郎が入るくらいの桃・・・どんだけでかいんだ？

「よかつたねー？」

「うん、よかつたな。」

俺の方にころんと転がる、うり。

こら、それじゃ頁見えないだろ・・・とか思うんだが、まあ、覚えてるから、話でいつか。

「桃太郎は、鬼退治にいくから、きびだんごをつくってくれと言いました。」

「おに？」

「うん、頭に角あつてな、悪い事するって言われてたもんだ。」

「おに、どこ？」

「んとな、鬼が島っていうとこだな。」

「おに、いじわうすう？」

「んー、どつかな。でも、悪いやつに違いはないっていう設定だな。」

うん、多分。

細かい事、どういう設定だったとか、覚えてない。
確か、鬼が島に犬サルキジといって、鬼退治して、鬼が降参して、
金銀財宝もってかえってきたんだっけ。

「おに、あやと、いじわう？」

「いや、鬼にあった事はないなー。」

「よかったねー？」

「う、うん、そうだなっ？」

ふわあ、と、あくびが出る。

つられて、あくびをして「くあ。」なんて声が出ている、うり。

「よし、今日はここまでにしておくかっ！」

「あいっ！」

「明日また、続き読もうなー？」

「あーいっ！」

パチン。

ランプの電気を消すと、微かに月明かり。

目を閉じて、隣で丸くなっているうりの頭を撫でる。

柔らかい、猫っ毛。

すー、すー、と、小さな寝息。

しばらく、毛並みに沿って髪を撫でて、布団をかけなおす。

明日、バアちゃんとこいったら、話してみよう。

これからのこととか、いろんなこと。

早くきめなくちゃいけない事もある。

ふっと浮かぶたびにこめかみに脈打つ感覚だった、不安は、今は大分、楽だ。

状況が変わったわけじゃない、と思う。

・・・でも、なんていうか。

ぱんつまるみえ。

「おあやー？」

「・・・ん？」

胸の上から、覗き込んでくる、うり。

「おー、おはよー。」

「あよっ！」

俺の上にごろんと横になって、じーっと顔を覗き込んでいたらしい。

ぺたぺた、と手のひらで顔のあちこちを撫でてくれるのが、ひんやりとしていて気持ちいい。

幾ら夕方が秋っぽいとはいっても、やっぱり、暑い日は暑いし、そういう時はセミも鳴く。

「あのえー、えこしゃん、のんだ。」

「飲んだ？」

「えこしゃん、のんだの。」

「あー、牛乳飲んだってことな？」

「いーね？」

「うんうん、よかったなー。今日はバアちゃんといって、帰りに猫さんのゴハンかってこような？」

「あいっ！」

返事をする、むくつと起き上がり、俺の腹の上に座る。

「よし、そしたら顔洗って、朝飯食って、でかけますか！」
「あーいっ！」

そろそろ、畑には何があるんだっけ。

こうとわかってりや、春のうちにしっかり手入れしとくんだった
なあ……。

土がいいからか、結構不自由しないくらいには育ってくれてて助
かるけどっ。

「確か……サトイモもあつたはずだよな？」
「あとも？」

「うんうん、むかし、ジイちゃんが食わせてくれたんだよ。な
んつつたっけな……。」

やたらうまかつたんだよな、確か……。

「あ、思い出した。はじきいも、だ！」
「うー？」

「サトイモ茹でてなー、先だけちつとむいて、塩つけて食うの。
うまかつたんだ。」

「うま？」
「うまつ！」
「いーねっ!？」
「いーねー！」

うん、多分、実になるはず。

毎年冬の前にはジイちゃん食わせてくれてたし。
去年掃除に来た時は見てないけど、どうだったかな……。。

「ぱちきーもー」

「パチキ・・・じゃないぞっ??」

確か、ワザの名前じゃなかったっけ、「パチキ」。

ぶんぶん、と手を振るうりをつれて、縁台から外へ。

びよん、と飛んで逃げるのは、アマガエル。

「あ！」

「カエルだなー。」

「ね？」

「かわいいよなー。」

「あー」

しゃがみこんで、じつとみてる。

柔らかなような緑色の肌に、くるつとした、小さな丸い黒目。それが、ふくふく、としていて、かわいい。

「さーで、すっきりして、今日も元気にいきますかー！」

「あー！」

見上げてみると、やっぱり空が高い。

サンマ焼いて、大根おろしとかもいいなーなんて思う、俺。

「あやとつ、ごあん！」

「んだなっ、腹減ったし、畑みにいこーかつ。」

「あいつ!」

ぷるぷるつと顔を振って水気をはらうと、畑に向かって走るうり。
いーなー、こうやって朝飯決めるのって、結構贅沢かもっ?
とはいえ、冬に備えて倉あたりに何かためておかないといけない
よな。

じーつと畑を見つめる。

確か、トトロがかぶってた葉っぱに似てるんだよな・・・?

「あっぱー!」

「技っ!?!」

うりが指差すのは、まさにそれっ!

・・・とはいえ、まだやっぱり小さいような気がする。

「んー・・・まだ・・・かな?」

「あだ?」

「うんうん、確か、ジイちゃんに食わせてもらったのは割と寒い
頃だった気がする。」

「むー。」

さて。

この時期他にくわせてもらったものは・・・。

と、畑を見渡す。

「あ。」

「う?」

「うり、あれ！」

指差すと、俺の指先をみる、うり。

「ちがうつ、俺の指じゃなくて、あれ、ジャガイモだ！」

「じゃがも？」

「うんうん、あれを、掘り出して、洗って、茹でて塩っ！」

「んま？」

「うまいっ！」

「おおおお！」

てっててって、と畑を走るうり。

・・あーあ、せっかく顔洗ったのに足とか泥だらけだぞ？

あとでもつかい手あらわないとな・・・って、俺も似たようなもんかつ。

じーっとしゃがみこんで、じゃがいもの葉っぱを見つめているうりの後に回る。

なつかしいなー、よくジイちゃんとかうやって引っこ抜いて収穫したんだよな。

「よーし、うり、しっかり握って。」

「あいっ！」

ぐっ、と二人で茎を握る。

「いくぞっ！」

「お！」

しょつ、と掛け声をかけて、一気に引っこ抜く。

「おー？」

「おおおお！」

ばらばら、と大きいものや、小さいものがくつついてくる、第一回収穫っ！

あわせて、いくつだ？

うん、これなら二人分余裕であるよなっ。

ばらばら、とふって、土を取って、一つずつ実をほぐす。
余ったやつや、余りにも小さいものはもう一度掘り起こした穴の中に戻して、来年に備えてっ。(って、それでいいのか？)

「いたあきあーしゅ」

「まてっ！」

「う？」

掘り立てのジャガイモをパンパン、として、口にいれようとする、うり。

それを慌てて止めると、口を開いたまま、首をかしげる。

「んーとな、確か、生のままじゃうまくないっ。」

「あうー。」

「しかしっ！」

「しっ！？」

「茹でるとうまいっ！」

「うでっ！」

握っていたジャガイモをふりふり、と振って、俺に渡す。
うん、歯型はまだついてないな？

「よし、んじゃ、持ってって洗って茹でてくうぞー？」
「あーいつ」

・・・とはいえ、両手に持つのにもちよつと無理があるな。
入れ物もってくればよかったか？

確か、台所にカゴがおいてあったはず。
あれ持ってきて・・・ってっ。

「うり・・・。」

「う？」

「女の子がスカートめくっちゃいけませんっ・・・が、まあ、い
つか？」

うりが、スカート（というか、ワンピースなパジャマだな。）を
めくって、そこにジャガイモを詰めている。

ロングスカートならいいんだろうけど、そんな長いのはいて歩け
る訳も無いので、短い、膝丈のスカート。

つまり。

ぱんつまるみえ。

天気の良い日には

「あやとつ、いーえーてっ?」

「あー、はいはいっ、もっていこうなー?」

「えあい?」

「うんうん、うりは偉いぞー、でもな、女の子はスカートめくつ
ちやだめだぞ?」

う?と首をかしげて。

「あやと、いーい?」

「ん?」

「あやと、めくうの?」

「いやっ、俺がやったら犯罪・・・だなっ。」

きよとん、として俺をみる、うり。

「う?」

「いや、俺がやったら俺悪い人になっちゃうなー。」

「かあいそーねー?」

「いやいやいやいや、それでいいのっ。」

ぼんぼん、とうりの頭を撫でて、おへそまで見えそうなくらいぱんつ丸見えな状態にしておくのも何なので(ぱんつのうしろのウサギがかわいい・・・って、変な意味じゃなくてっ!)そそくさと再び井戸へ戻る。

ゴトゴト。

じゃあああああ。

「おー、キレイになったなー。」

「あつたー！」

二人して芋を洗う事、10分くらいか。
ついでに足とか腕とか、顔とかもう一度洗って。

「お、湯も沸いてるな。」

洗う前にカマドに火を入れておいたおかげで、丁度湯も沸いてる。
うん、手際よくなったなあ、俺。

なんて自己満足に浸りながら。

「よし。うり、ジャガイモゆでるぞつ。」

「あいっ！」

「熱いの飛ぶから、そーっといれような？」

「あい！」

ぼちゃ。

うりが、まず一つ。

「うん、上手だぞつ。」

「あー」

そして、俺が、まとめて両手にもって、そーっと鍋に・・・

「うあぢっっ！」

バシヤッ。

「やとっ!?!」

欲張りすぎたっ。

まとめて持ったはいいんだがっ!

「あー、熱かったっ。うり、大丈夫か？」

「あいつ。」

そーっと、湯に入れる、の加減ができなくて、まとめてドボン。

幸いそうは湯が飛ばなかったんで大丈夫だけど。

「・・・手際はまだまだ、だな。」

「あぢ?」

「いや、大丈夫っ。ありがとな?」

「あいつ。」

「おー、ほくほくだなっ!」

「おくおくっ!」

茹でたてのあつついジャガイモを火傷しないように注意しながら、皮を剥く。

それに塩をばらばらっとふりかけて。

「いただきまーすっ!」

「たーきあーしゅっ!」

はふはふ、なんて息を吹きかけて少し冷ますのをまねるうり)・
・よだれを拭いてやる。)と、俺。
湯気までが、こう、なんていうか食欲を激しくそそるっ。

それに、がぶっ・・・と・・・。

「うめえ!」

「めー!」

マジでうめえ!

えらい熱いんだけど、それに塩を振って食うのがこんなにうまいとはっ!

「じゅっ・・・めー!」

「あっちいけど、んまいっ!」

塩を振って、湯気でふわーっと水分が飛んで。

それをがぶっと口にいれると、熱くて涙出るんだけど、すっげえ幸せっ。

皮むいておいて、軽くつぶしてくってもいいかーなんておもってたんだけど、こりゃ残らねえな。

ほくつといい匂いがして、味噌つけたきゅうりも齧って。

「飯がうまいって最高だよなー！」

「あー」

「食ったら、バアちゃんとこ行って、帰りに猫さんの飯かっついこうなー？」

「あーい」

えらく晴れた、いい天気の日。

こういう日って、無条件で幸せになっちゃうよなー、なんて思う。空は高く、空気は澄んでいて、なんか気持ちいい。

自転車に乗って、バアちゃん家まで行くのも大分慣れてきて、うりと二人で歌なんて歌いながら田んぼ道を走る。

「じゃーがーだらーのー」

なんの歌かは、深く考えない方向でっ。

「お、うり、見てみ？」

「う？」

「ほら、川に魚がいるぞっ？」

「あかなー？」

ぱしゃつと水面に丸く円を残して飛び跳ねる魚。
冬になったら凍るのかな。

ジイちゃん家の庭に冬に水撒いて、凍らせて滑るのも楽しいよな
ー、なんて思つて、考えてみる。
手袋して、うりとつるつる滑ったりして、甘酒飲んで。

うん、冬が楽しみになってきたぞっ！

わら!?

「こんにちわー。」

「ちいあー!」

縁側で、麦茶を飲んでいるバアちゃんとミヨコさんに声を掛ける。

「まってたようー?」

「そうよー、二人来てくれる様になってからほんとに楽しみでねえ?」

嬉しいなー、ほんと。

思わず力才がにやける。

・・・つて、あれ、なんだ?

バアちゃんの側においてある、藁を縛ったもの。

丁度、俺の腕の、肘曲げた先くらい。太さも似てるな。

「バアちゃん、ミヨコさん、それなに?」

「あに?」

指差して、近寄ってみる。

「んー?」

「ああ、おニイちゃん、見たことない?」

二人してくすくすっと笑う。

・・・あの形に、藁。

思い当たるものといえば。

「藁人形？」

「ぶっ！」

「あははははは！」

吹き出すバアちゃんに、大笑いするミヨコさん・・・ってっ。

「ちがっわようー、藁納豆よっ。食べた事ない？」

「ニイちゃん面白い事いうねえー？」

そう言って、俺に一つ渡してくれる。

なんとなく、あったかいような・・・うわさでは聞いたことあるけど、マジで藁だぞ、これ。

うりに渡してみると、ふりふり、と振って、顔を近づけて、匂いをかいで。

「うり、どう？」

「う？」

特に変わった様子はない。

「じゃあ、今日のお昼ゴハンに食べよっかねえ？」

「そうしようかあ、おニイちゃん達、食べていけるよね？」

「ありがたくっ！・・・っていつもいつもすみませんっ。」
「んっ。」

ぺこつと俺が頭を下げるのをみて、うりが真似をする。

ほんと、ここんとこずうつとバアちゃん家きては、飯ご馳走になつたり、野菜わけてもらつたり、魚もらつたりって、世話になりっぱなしだ。

来る前にスーパー寄ってお土産買っていたりしたこともあるんだけど、

「いいのよー、来てくれて手伝ってくれて、話し相手できて嬉しいんだからねえ？」

って、ミヨコさんにもバアちゃんにも言われて。

「もし、お遣いお願いしたい時は帰り際に言うからねえ？」

なんて笑って、砂糖の空箱を指差す、ミヨコさん。

たまーに、砂糖の買出しを頼まれるけど、それもなんだか嬉しい。

（その日のおやつがこれまた嬉しい。）

「あ、絵本ありがとございましたっ、昨日寝る前に、うりと読みました。」

「あい！」

こくこくっ、と頭を振って嬉しそうに笑う、うり。

そんだけ喜んでくれるなら、今夜も続き読まないとなっ。

「あらあ、よかったあ、又出てきたらあげるからねえ？」

「うりちゃん、読んでもらったの、よかったねえ？」

頭を撫でもらって、にこーっとして、「あーっ」なんて声が出るうりに、同じようににこーっとするミヨコさん。

笑顔って、伝染するよなー、と思う。

すごく嬉しそうにしてるよ、しらねてっっちゃまにっや。

いめん。

「あつ、そうだ。」

つい、俺までなんだか嬉しくて忘れかけてた。

「あの、明日。」

「うん？」

東京、帰って色々してこないといけない。
更新の話と、相談と。

もちろん、その前にババアとこいかないといけない。
改めて、ちゃんと話しておかないと。
決める事決めておかないと、動けない。

「綾子おばさんの所と、東京にもう一度戻ってきます。」

「ニイちゃん、大丈夫？」

「はい。・・・なので、明日一日、うりのことを頼みたいんです。」

離れていたいわけじゃ、ない。

ほんととは、一緒にこのままこうしてここにいたい。

「う？」

じつと俺の顔を見る、うり。
その頭に手を置く。

「うり、明日俺、ちょこつとでかけてくるから、な？」
「う？」

首をかしげて、不思議そうな顔をする。

「それじゃあ、明日はうりちゃん、アタシとバァちゃんと遊ぼう
ねえ？一緒にになにしようかあ？」

ミヨコさんがうりの両手を握って、せっせっせー、と手をゆする。

・・・が。

「あやと、どこいく？」

手を繋がれたままで、うりが言う。

・・・離れたいわけじゃない。

でも、きつと嫌な思いをさせる。
ババァと、タクとの話し合い。

きつと、俺も——嫌な人間になる。

「ちょこつとな、話し合いしにいった、もう一回東京いった。そ
したらすぐ戻ってくるからな？」

「うりも。」

「うり、すごーくおいしいプリン買って来てやるから、明日はいここにお留守番できるよな?」

きよとん、と首をかしげていたうりの、真ん丸い大きな目。

それに、じわあつ、と涙。

「うりもいくう。」

「うり、またいーっぱいケーキも、プリンも、並べて好きなのから食べていいぞ?おいしいお土産いっぱいかってくるから、・・・な?」

「——あー・・・。」

ぼろぼろつと。

大粒の涙が零れ落ちた。

「うりちゃん、ミヨちゃんと、バアちゃんと、一緒にあそぼう? おニイちゃんお土産一杯買ってきてくれるって、いいねえ?」

「バアちゃんがまたうんまいもの食わせてやるよう?」

ミヨコさんとバアちゃんが口々にうりに言う。

それでも、ぼろぼろと、止まらない涙。

「あーう・・・っうりもっ・・・うりもっ・・・あやと・・・っ。」

いつも、転んだりして泣く時みたいに、わーっと泣くんじゃなくて、ぼろぼろ涙零しながら、縋りつくように。

両手を握られたまま、次々にあふれる涙が頬を伝って、ワンピースに涙の跡を作っていく。

「うり・・・、帰ってきたら、俺、絶対もううり置いていかない
って約束するから。」

わかってる。そんな事が言われたいわけじゃ、ないよな・・・。

でも、もし。

もし、またうりに何かあったら。

うりが見えない事で、うりに嫌な思いをさせたら。

また、うりが目を開けなくなったら。

「な・・・？うり、絶対遅くならないうちに帰ってくるから。そ
したら、おかえりって、うりに迎えてほしいんだ。」

「・・・つやとっ・・・。」

ひつくつ、としゃくりあげる、うり。

その手を握って、うんうん、と頷くミヨコさんと、小さな背中を
撫でてくれている、バアちゃん。

「うりが待つてってくれるーって思ったら、俺、頑張れるからさ、
・・・な？」

「・・・あう。」

ひつくひつく、と震える肩。

「おかえりーって、言ってくれるか？」

「・・・あいつ。」

って言いながら、首を振る、うり。

あい、あいつ、って言いながら。

「うり……。」

「やとっ……。」

「……ん？」

「……うり、おじやりーで、……あいつ。」

「うり、ありがとな……っ。」

下がった眉毛。

潤んだ目。

我慢させてるのは、よくわかってる。

でも、待ってて。俺、すぐ帰ってくるから。

うまいお土産いっぱい買って、嬉しい話持ってくるからな。

「うりちゃん、明日はバアちゃんがうりちゃん家に行くからねえ

？」

「ミヨちゃんもいくよー？」

バアちゃんとミヨちゃんが、うりにそう言う。

「すいません、お願いします。」

「……あー……。」

ぐうううううう。

鳴り響いたのは、うりの腹の音。

……あー、確かに、そろそろ昼なのかつ？いわれてみると、かすかにゴハンの炊ける匂いがあるような気がする。

「うりちゃん、ゴハンにしょつかねえ？」
「あいっ！」

ぷぷっ、と笑うバアちゃんとミヨコさん。
すつと立ち上がると、ぽんぽん、とうりの頭を撫でてカマドの方
に向かうバアちゃんと、畑に向かうミヨコさん。

うりが、俺の顔を見て、にこっと笑ってくれる。

「うり、ありがとな。」
「う？」

もしかしたら、今ので、うりに嫌われたんじゃないかと、怖くて
俺の方を向いて、いつも通りににこーって笑ってくれた瞬間、ほ
うっ、と溜息。

同時に、すつと胸のつかえが取れたみたいなの、ふわっとするよう
な。

溜息にも、色々あるんだな。

かえりみち

「ごーあーんっ」

「はいはい、蕨納豆たべようねえ？」

「あー？」

「うわ、ほんとに蕨の中に入ってる！」

多分、はじめて見るとびっくりすると思う。
蕨だぞ？

その中に、豆が入ってて、普通に納豆。

もちろん、ねばねば。

「よく混ぜて、それから醤油たらすのよう？」

「先醤油じゃないの？」

「後から入れたほうがいーっぱい糸ひくよう？」

そっかー、なんて納得しながら、ひたすら混ぜて、醤油をたらす。

「ほーら、出来た。」

「う。」

顔を近づけて匂いをかぐ、うり。

「……………」

ぱかーっと、口が半開き。

どうなんだ、それってどうなんだっ？

「そんじゃ、いただきますっ！」
「あしゅ！」

炊きたてのご飯のいい匂い。

ちよつと見慣れないんで違和感あつたんだけど、うまいぞ、藁納豆。

なんつーか、柔らかくて、飯に合う。

「うまいっす、マジでっ！」

「うちやす、ばびで！」

「あらあらー、うりちゃん、口の周り糸だらけよー？」

「たーんと、茶あのおでなあ？」

あー、糸ひきまくってるおしゃべりにくいよなっ。

どっかの映画にでてくるモンスターみたいな口の中になってるぞっ！

「そしたら明日朝、バアちゃんとミヨちゃん行くからねえ？」

「はい、お願いします。」

「うりちゃん、またあしたねえ？」

「あいっ！」

いつもなら、ついつい日が暮れる前までいるんだけど、今日はスパーにも寄って、猫のメシを買ってきてやらないといけないもんで、ちよつと早めにバアちゃん家を出る。

明日の朝早くに来てくれるって言うてくれたから、むこうに出来るだけ早くつく電車に乗って。

部屋から荷物もある程度運んできちゃいたいから、車があればよかったんだけど、そうそう贅沢もいってらんないし、大した家財道具もないから、ちょっとムリすれば何とでもなるだろう。

「うり、今夜何たべたい？」

「なし！」

「おっけ、ナスな？」

「あい！」

珍しくすれ違つ自転車に乗ったおじいさんに会釈して、畑を抜ける。

電灯もないから、暗くなったら転ばないように気をつけないといけないよなーなんて思ってるうちに、夕焼け空。

「日が落ちるの早くなつたよなあ、あつという間にもう夕方だぞ。」

「えー？」

「なー、ちよつと前まで明るかつたのになー？」

「あー。」

パチン、と足元のスイッチで電気をつける。

ほんの少し、ペダルが重くなって、畑道に一筋の明かりが走る。

「おー」

「よしつ、こつからは坂道だから楽だぞー、しつかりつかまってるよー？」

「あいっ！」

大した距離じゃないんだけど、なだらかな坂道。

背中にびったりとしがみついて、俺の横腹あたりからうりが顔を
出して、

「あうあおーあー」

なんて、口を開けている。

ひんやりとした夕方の風が心地いい。

もう数日もしたら、肌寒くなるんだろう。

秋の夕暮れと違って、夏の暑さの反動でか、無性に寂しくなっ
たり、寒さを感じるもんだよな。

通った事もないはずだけど、アスファルトの道路に、自分の
身長より高い積み上げたコンクリートかなんかのレンガの壁があっ
て、そこを歩いてる様な記憶があったり。

そういうことを思い出したり、過ぎ去った昔を思い出して、寂し
くなるっていうのが、よく言う「秋は物悲しくなる。」ってやつな
んだろうか。

「あ、うり、口開いてると又虫はいるぞっ？」

ふっと思ひ出して、うりに言つと、

「ふあー・・・っ！」

「威嚇!？」

速度を落として、ちらつとうりを見ると、・・・口を開いたり閉
じたり。

そのたびに、「かぽかぽ」とか「はぶはぶ」とか、妙な音が。

「どうした？」

「ふうー。」

「・・・口渴いたんだな・・・？」

うん、経験あるっ。

飯っ！

「１９８０円になります。」

「じゃあ、２０００円でー．．．っと、すいません、細かいのあります。」

さすがに店しまるのが早いなー、って、今何時だろ？

さつき暗くなったと思ってたのが、スーパーつく頃にはすっかり真っ暗。

そして、シャッター閉めようとしていた、店員さん。

あわてて駆け込んで、買ったものは、牛乳と、ジュースと、キャットフードと、油とか、ちょっとした調味料と、カステラを一本。

カステラは、明日バアちゃん達来た時に食べてもらおうと思って。

「どうも。おやすみなさい。」

「はい、お気をつけて。」

買ったものを袋に詰めると、店員さんに頭を下げて、店を出る。

外はもう誰も歩いていない。

星があちこちに出ていて、じーっとみていると瞬いているみたいにみえる。

さつきので口の中がカラカラだろうと、うりに小さなパックのジュース。

ストローを刺してやって、こぼれないように一口先にもらって。

「よし。」

「あゝ」

うりをひょいっと持ち上げて、自転車の後に乗せると、ジュースを持たせてやる。

「じゅあーって、んまああゝ」

「そーかそーかつ、帰り道は口開けっ放しにしちゃだめだぞー？」

「あーいつゝ」

「帰ったら、ナスの油いため作ろうなー？んで、猫さんにゴハンあげよう。」

「えこしゃん、えこしゃん、おいでーって、ねー？」

うん、やっぱり自転車にはカゴがあると便利だよな。

結構な量になった荷物とか、かなりたすかるし、なにより移動が楽だ。

「んじゃ、しゅっぱーっ！」

「あーっ！」

ガラガラガラ、と後の方でシャッターを閉める音が遠ざかる。

その漏れる光が、徐々に細くなり、

「ガチャン」

と微かな音と共に、消えて、あたりは真っ暗に。

「しっかりしがみついているんだぞー？」

「あいっ！」

また、足で自転車の電気のスイッチを入れて、ジイちゃん家向か

ってペダルをこぐ。

「うー、ちょっと冷えてきたなー。」

「さぶいの、ちつとー？」

自転車を庭に止めて。

荷物を持って、居間まで向かう。

途中でいくつか星明りを頼りに畑からナスをとって、ささっと洗って。

井戸からでってくる水が、ほんの少し指先が痛くなるくらい、冷たい。

ガラガラ、と土間の戸を引いて、

「ただいまっ！」

「たあいま！」

二人で、家に入る前に言い合う。
そして、一歩。

「おかえりっ！」

「おかえい！」

家の中に入って、声をかけあうと、靴を脱いで上がる。

結構土間から室内までの入り口の高さがあるんで、荷物を持った
うりごと持ち上げてやって、ランプとロウソクに火を灯して、明か
りを取る。

「よし、うりっ！」

「あいっ！」

「今日の任務はっ！」

「あっ！」

「フライパンを探してくる事だ！」

「あいっ！」

再び、アイター、のポーズ。
うん、敬礼、なんだよな？

「あ、フライパン、わかるか？」

「うーう？」

・・・任務は変更されましたっ！

「んじゃ、うり、コップもってきてなー？」

「あいっ！」

「よしっ、んじゃその間に俺は風呂沸かして、フライパンさがし
てくるからな？」

「あいっ！」

ぐっ、と二人で腕を交わして、それぞれ違う進行方向へ。

俺は、風呂場で、うりが、台所。

一つずつローソクをもって歩くんだけど、ジイちゃん家の風通し

のよさの賜物っていうか。
風呂場にいても、台所や廊下のあたりで光がみえるから、安心できる。

・・・昔は、お化けだ！とか怖がってたんだろうけど。
まあ、それ言ったらうりだって・・・っと。

ガラン、ガラン。

薪を追加で釜に投げ込む。
バチバチっと音を立てて、木っ端が爆ぜる音がする。

「あやとー、あつたー！」

ふつと見ると、ロウソクの光は居間のあたり。

「おー、えらいぞつー！んじゃそれに牛乳入れておいてなー？」

ちよつと大きな声を出して答えると、

「あーいつー！」

つとりの声が聞こえてきた。
ひゅうつと吹く風に、ロウソクの火を消されないように手で風を避けて、風呂のフタを開ける。

「よし、これでいつか。」

まだひんやりとした水があつたまるまでそれなりに時間がかかる。

これからメシ作って、食って、猫にもあげて。
そしたら丁度いいくらいかな。

「うりー、今行くぞー。」

「あーいつ！」

彼方から聞こえてくる声。

うりの口ウソクの光がうろうろしてるのは、多分持ったままうろ
うろしてるんだな、うん。

危ないから持つところを作ってあるから、その辺はぬかりなしっ！

「・・・んー・・・。」

「う？」

聞いた所では、ナスを薄く切って、油は多めで炒めるだけ。
それにしょうがと醤油で食べる・・・んだけどっ。

「ちよーつと、難しい・・・よな？」

「うり、やうー！」

「包丁？あぶないぞ？」

「あー。」

かしてー、とでも言いそうに包丁をもった俺に手を伸ばす、うり。
前にスイカを切った、刃渡りの短いそれなんだけど、やっぱ危な
いような気がする。

ちなみに、俺が切ったやつは・・・厚さはバラバラで、まあ、なんていうか不恰好。

「じゃあうり、まずは今日は俺が切ったやつ炒めて、それで明日、頼むぞっ?」

「う?」

「俺が切ったやつでまずはごはんにしような?」
「うりは?」

ナスをもって、包丁にじーっと目をやるうり。

「うん、まずは今日はこれでゴハンにしよう?お風呂が沸くから、食ったら早いとこ風呂入って、猫さんにもゴハンやらないとだろ?」

「あいっ!」

こくつと頷いて、俺にナスを渡す。

「えこしやんに、こえ!」

「猫、ナス食うかな・・・?」

ジャアアアアッ!

「うにあっ!」

「大丈夫だぞー、でも、油はねるといけないからちょこつと下がつててな?」

油の音にびつくりして飛び上がり、目を丸くするうり。
水もうちよつときっておかないとダメだったかな。

「よし、これでいいかな。」

「う」

「そんなじゃ、居間いくぞー？」

「あーいつ！」

しんなりするまで炒めて、皿に乗せると、不恰好ながらもいい匂い。

つい、量が多すぎるかもなのは、ご愛嬌、ってことでっ！

・・・大きな皿に、山盛りのナス炒め。

「いただきまーす。」

「あーしゅ。」

ランプとロウソクをまとめておくと、やっぱりかなり明るい。

それに、ほんのり温かくて、キャンプみたいな感じ。・・・って毎日そうなんだけど、秋の夜長とかっていう言葉がしっくりきそうな、今日みたいな夜はほんとそう思う。

キャンプ、してみたかったんだけど、熊に襲われてーとかニユー
スみて、怖くて一回も行ったことない。

実際に見たことないから怖いんだけど、まあ、熊にしたら自分家の庭に侵入者ーって感じなのかな。

「お、うり、ハシの使い方うまくなったなー？」
「うしししっ。」

前までは俺の真似をしようとしていたんだけど、片手にまとめてもって、スプーンみたいにして食べてた。

大分うまくなったもんで、今はなんとか挟んで口まで持っていけている（3つに2つは落ちてるけど。）ようだ。

「ま！」

「おー、思ったよりうまいっ！」

その、たどたどしい手つきで一口に運んで、うりが顔を明るくする。

ハシでナスを口まで運ぶ時の、眉毛に皺を寄せている真剣な顔とはえらい違いだ。

「あー！」

口の中のは、もう飲み込んでしまったようで、また、ナスに手を伸ばす。

・・・また、眉毛に皺を寄せて、えらいこれまた真剣な顔で。

ハシでナスをつかんだ瞬間、ぴくつとあがる眉毛。

ごくんっ、とツバを飲み込む仕草。

そーっと、そーっと、おそろおそろハシを口まで・・・って、自分からハシに近づいていつてるぞ、うり。

「んふー。」

おまけに鼻息まで漏れ出して、ふるふる震える指先の先に顔を近づけて、あんぐりと口を開けて・・・ってっ。

「ぶはっ！」

思わず噴出した俺にびくっとして、うりのハシからナスが落ちた。

「ああああー！」

「あっ！」

ものすごく、がっかりした、顔で、皿に落ちたナスを見て、涙目になるうり。

・・・なんか、すっげえ悪い事した気になるな、ほんと。

「ほーら、うり、こっちむいてみ？」

「うー・・・？」

「ほら、あーんして？」

「あーっ！」

お詫びに、と、一つナスをハシでつまんでうりの口にいれてやる。あぐあぐと口を動かして、これまたうまそうに食いながら、口の周り油だらけだぞ？

「うあいねー！うまあ！」

「そーかそーか、また作ろうな？」

「あいっ！」

ぱかーっと口を開いて、俺を見る、うり。

・・・雛鳥かつ！

えこに決定。

「つかー、風呂はやあっぱたまらんなっ！」
「っあー！」

今日みたいに晴れた日だと、星がほんとにキレイ。
湯気でうつすらくもって、ランプの光がもやーっとしてて。
もっともつと寒くなったらお盆浮かべて、日本酒浮かべたいなー、
なんて思うぞ、うん。

「風がきもちいいなー、これはたまらんぞっ！」
「あーっ」

かぱーん、と膝に乗っているうりが後にゆっくりと湯に浸る。
ゆらゆら、髪の毛が揺れているのがうつすらと見えて、それが膝
に当たってくすぐったい。

にゃーん。

「ー！」
「おー！」

にゃーん。

聞こえるのは、昨日の猫の声。
ばちゃっとうりが湯から頭を起こして、俺の頭につかまって立ち
上がる。

「えこしゃーんー！」

きよろきよろ、と辺りを見回してみるが、どうもよく見えならしい。

十分あつたまつたし、今日は早めにでるかな。

「えこしゃーん？」

「・・・にゃー。」

「！！！！！！」

くるつと俺を振り返る、うり。

「・・・いや、つ、つい・・・な？」

「こら、うりっ！ぱんつはきなさいっ！」

「えこしゃんも！」

「猫さんはぱんつはかないのっ！」

「いたー！！！」

風呂から上がって。

うりの体を拭いてやっているときに、にゃーん、と鳴き声。

それこそ猫のようにびくつとして、タオルひっかけたままで全力疾走（して、裾を踏んずけて転んで、泣いて。）して、猫を探すうり。

「ほら、これエサあげようなーっ？うり隊長、とまれっ！」

「うー！」

ぴたっと、敬礼^{アイター}して、縁側で立ち止まる全裸の幼女。
・・・そして同じく全裸で追いかける22歳独身男性。

「お、食ってる食ってる。」

「えこしゃーん。」

「猫にも名前つけてやるっか。」

「う？」

やっぱり、すぐ側には近寄ってこないが、ちょっと離れたところでエサを食べている、猫。

昨日よりは、ほんのちょっと警戒心がとけているのかな。

「猫の、呼び名だな。なにがいい？」

「えこしゃん。」

「いや、ほら、それは猫だろ？」

「う？」

「んー・・・。」

「じゃあ・・・あやと？」

「なんでっ！」

不思議そうに首をかしげる。

別にあやと、でもいいんだが、混乱するし、ややこしいだろうっ？

「えこしゃーん？」

「・・・にゃー。」

カリカリ、と音を立ててエサを食べていた猫が、ふっと顔を上げる。

ランプの明かりに照らされている、小さな体。

目は夜だからか、まんまる。

ピンとはったヒゲがなんだか誇らしげだ。

「・・・じゃ、じゃあ、名前は、えこ、でいつか？」

「えこしゃん」

ん？と軽くこつちをみて、首を傾げるも、カリカリとエサを食べ始める、えこさん。

・・・地球に優しそうな名前だし、うん、えこ、で。

「にゃーん。」

「ん？」

しばらくカリカリと小気味いい音を立ててひたすら食べていたのだが、満腹になったのだろうか。

ピタピタと音を立てて皿から水を飲んで、一声鳴く。

「もうちよつと慣れたら、家の中くるかな？」

「えこしゃんも、おうち？」

「うん。寒くなってきたら、一人で外だとかわいそうだろう？」

「えこしゃん、いっしょー！」

にこーっとわらって、縁側の下に手を伸ばす、うり。
しかし、やっぱりびくつとにげる、えこ。

「まだ、しゃあないな。何日かしたらきつと慣れてくれるからな？」

「うー。」

寂しそつに、縁側から上半身を下にたらし、手をふりふりする、うり。

「よし、中はいろ？」

「うー。。。。」

足をバタバタさせて、くぐもった返事。

んー、さすがに野良猫だと言二日じゃなれてくれないから、残念だけど、な？

「うり、おいで？」

「あうー。」

・・・頭が重いのか？

よいしょつと声を掛けて、縁側からうりを抱き起こす。

なんとなく、「おおきなかぶ」とか、そういう童話を思い出して、思わず笑う。

「だー。」

「うり、顔まっかだぞつ？」

「あや。」

ふにー、つと重力に従順な感じにくにやつと縁側にへたり込んで、いるのを抱きかかえて、縁側を後にする。

あんこくえ。

「さて、今日はもう布団いくか？」

「う？」

「また昨日の話の続き読んでやるから、な？」

「おもたお？」

「そそそ、昨日は桃太郎が桃からでてきたろ？今日は桃太郎、鬼が島までいくかもしれないぞ？」

「おおおお！」

明日は朝早いし、今日は早めに寝ておかないといけないしな。パタパタと、布団に走るうりを追いかけて、絵本を取り出す。ランプを枕元に置いて、・・・今日はもう蚊帳はつるさなくていいかな。

いつかえこも家の中に入ってくるようになったら、うりと、えくと、俺と。

一緒に布団で眠るのもいいよなっ。

「あやとー、ももたお！」

「はいはい、んじやいくぞー？」

「あいつー！」

ころんつと寝転んで、俺を待つ、うり。その隣に寝転がると、絵本を開く。

「よし、んじや。」

昨日読んだところまで、パラパラと頁をめくると、読み始める。

「桃太郎はすすくと育ち、あっという間に大きくなりました。」

「うりも？」

「ん？」

「うりも、おつきく？」

・・・うりは大きくなるのかな。

考えた事がないわけじゃあないけど、なるべく考えないように、
っていうか。

いつか、うりも20歳とか、今の俺と同じくらいの年になったり
するのかな。

そしたら、その頃俺はいくつだろう。

「あやと？」

「あ、ごめんごめん。」

つい、考え込んでやって、話が止まってた。

うりとこれから一緒にいられるって思ったときに、思いついた疑
問。

考えないように、今はまだ考えないで・・・って思ってただけ
ど、その「今は」は、いつまでだろう。

「あやと？」

「あ、うん、そうだな。うりもいいこになるぞ？」

「いま？」

「今も十分いいこだぞっ？」

「あー」

うん、とりあえず、今夜はいいってことにしよう。

うりがオハナシ続き待っててくれてるし、・・・いいよな？

「ももたお！」

「よし、んじゃ読むぞ？」

ぱらっと一枚めくって。

「ある日、桃太郎は言いました。おじいさん、おばあさん、私は鬼退治にでかけてきます。どうか、キビ団子を作ってもたせてください。」

「だんご？」

「そう、キビ団子。」

「うま？」

「んー、俺食ったことないな。明日バアちゃんに聞いてみ？」

「あいっ！」

絵本には、桃太郎が左手に袋をもって、おじいさんとおばあさんに見送られていくところか。

キビ団子、どんな味なんだろう？

昔、黄身ダンゴだと勘違いしてたこともあったよなー・・・って、
続き続き。

「おばさんはキビ団子をもたせてやると、おじいさんと一緒に桃太郎を見送りました。」

「いつてあつしゃー。」

「はい、言ってきました、って・・・まあ、そうだな。」

うんうん、と頷くうり。

「桃太郎は旅の途中で、犬に会いました。」

「いう？」

「わんわん、ってなくやつだな。」

「おー？」

絵本を読むのって、なんだか照れるな？

この、口調ってどうか、読み手と登場人物の切り替わりをどう読むか・・・って、初めての経験だし、しゃあないよな？

「よし、んじゃ俺式桃太郎でいくぞ？」

「う？」

「うりは、ここの絵みててな？俺が雰囲気だして読んでやる。」

「あいっ！」

ぱらり、ともう一枚めくると。

「そして、桃太郎は旅の途中で、犬に会いました。そこで、犬は言っただ。」

「う？」

「ダンゴくれよ。」

「おお！」

ぱらり。

「桃太郎は犬にダンゴをあげると、犬は桃太郎の家来になったんだな。」

「けあい。」

こくこく、と頷くうり。

家来、って意味わかってるかなー？

「そしてまた歩いていると、今度は・・・。」

「こんどあ？」

「サル！」

「きああああ！」

「いや、サルは怖くはないぞっ？」

ほっとするうり。

うん、サルは多分怖くないぞ？（実物見たことはないけどな。）

「サルも言いました。」

「う？」

「ダンゴくれ。」

「けあい！」

「そうそう、そしてダンゴくって、サルも家来になりました。そしてまた歩いていると、今度は・・・。」

「えこしゃん！」

「おしいっ（のか？）、今度はキジだ。」

「きーじ。」

キジ・・・って、やっぱりこれも見ただことない。

うりと絵本の絵をみて、うんうん、と頷く。

・・・綺麗な鳥なんだな。

「キジも言いました。」

「あんこくえ？」

「い、いやっ、ダンゴくれっ！」

「けあい？」

「そう、キジも家来になりましたっ！」

うんうん、と頷く、うり。

ぺたーっと枕に頭を乗せて、瞬きが半分ゆっくりになっている。

・・・そろそろ眠いのかな。

「うり、眠いか？」

「あんこー。」

「・・・よしよし、寝ような？」

「あいー。」

明日、帰りにはお土産でダンゴ買って来てやるのかな、アンコがついてるやつ。

別バラってやつだな。

「ニイちゃん、おはようさーん。」

「おにいちゃん？」

・・・ん・・・。

チチチ、と鳴く鳥の声と、俺の名前を呼ぶ声。

「う？」

隣を見ると、目を開けて、んーっ、と伸びをしている、うり。
目覚めほんとにいいなー、・・・って。

「バアちゃん、ミヨコさん？」

「あーちゃ？いよこしゃ？」

体をおこして、縁側に行くと。

「はい、おはようさん。」

「おニイちゃん、おはようー？」

バアちゃんとミヨコさんが来ていてくれる。

庭の端っこに自転車を二台止めて、その手には風呂敷包み。

「あー」
「」

「ご機嫌でうりがバアちゃんとミヨコさんににこーっとして、ご挨拶。」

「おはようございますっ。」

「あよー!」

二人で挨拶すると、にこにこして、バアちゃんとミヨコさんも挨拶を返してくれる。

そして、縁側に座って風呂敷を広げると。

「これねえ、朝ごはん作ってきたのよう。」

「昨日おこわさん作ったから、うりちゃんとニィちゃんと食べようと思ってねえ?」

見せてくれるのは、これまたうまそうなおこわ!

煮物に、漬物とかも別に包んであって・・・うまそうっ!

ぐうううううっ。

と、朝から鳴るのは、うりの腹・・・と、俺の腹っ。

「すっげ嬉しいですっ!マジでうまそうっ!」

「んま!んま!?」

バタバタ腕を振って、広げられた風呂敷に釘づけなうり。
そういう俺も、今ひとつつまみたい。

・・・がっ!

ここはぐつと我慢して、まずは顔を洗ってからっ!

「そしたら、上がってください、俺とうりと、顔洗ってすぐ来るんでっ。」

「はいよう。」

「それじゃ、おじゃましますー!。」

二人を居間に誘って、コップにジュースを注ぐ。

「あいっ!」

・・・居間に座って、コップを待つうり。

うん、まずは顔洗って、キレイキレイしてからだぞ?

「つかー!さっぱりしたああ!」

「っじゃー!あばいたああ!」

井戸の水で、じゃああつと顔を洗って、ぶるぶるっと頭を振る。

すつきりと目が覚める、冷たい水が気持ちいい。

干してあるタオルでうりと顔を拭く。

今日の天気はなかなか上々、空気は澄んでて空も高い。

こないいい日に、朝からうまい飯が待ってるなんて、幸先最高だよなっ!

「よし、うりっ！」

「あいっ！」

「居間に突撃iiiiiiii！」

「げきiiiiii！」

「ただいまっ。」

「たあいまああ！」

居間まで全力ダッシュ。

バタバタバタと足音を立てて、居間にたどり着くと、バアちゃんとミヨコさんがジューズの見ながら待つてくれる。

「はい、おかえりい？」

「さあさ、食べよ食べよっ？ミヨちゃんとバアちゃん特製だからねえ？」

「つきやあああああ♪」

「すっげー嬉しい！いただきますっ！」

4人で手を合わせて、いただきます、のご挨拶をすると、うまい朝飯の始まり始まりー！

「・・・ま！」

「うめええ！」

おこわが、これまた・・・うまいっ！

味付けとか、なんていうか、ほんとに幸せ。

「でしょう？」

「そりゃあそうようー？」

なんて、笑ってお変わりを渡してくれるバアちゃんとミヨコさん。

「あ！カステラが戸棚の中にあるんで、今日おやつに食って下さいっ！」

うまい飯に忘れるところだった！

昨日買って置いたカステラ、戸棚に閉まってある。

「バアちゃんかすてら大好きだよ、ありがとねえ？」

「ミヨちゃんも甘いもの好きなのよー、おニイちゃん、ありがとねっ？」

「うりもー、つきー！ありやとええ？」

女三人で、にこーっと顔を見合わせて笑う。

「お土産に、甘いもの買ってきますんで、おなかスペース空けていてくださいねっ？」

と俺が笑って言うと、

「そりゃ、甘いものは別ようー？」

「ねえ？」

「えー」

完璧な女の団結力、ってやつだなっ？

思わず噴出して、ぐっ、と親指を立ててにっとなつ。

菊乃蔵 雲野現る。

バスから眺める外の景色。

数日振りに暑さが戻ってきて、あの日つりとバスに乗った事を思い出す。

今日は、一人。

終点、駅で降りると、相変わらず人はまばらでがらんとしている、駅。

東京までの切符を買ったと、クーラーボックスでアイスを買っているのを見つけて、ひとつ。

「・・・暑いな・・・。」

改札を抜けて、また、前と同じベンチに一人で座る。

「時間、丁度良かったな。」

腰を下ろしたとほぼ同時に電車の到着アナウンス。
再び立ち上がると、到着を待ち、乗り込む。

「ふう。」

これからする事は、何度も頭にシミュレートしてある。

まずは、弁護士。

そして、部屋の手続き。

用件済ませたら、土産を買って、帰る。

あれこれ考えて、先に物事知ってから。

ある程度は知識つけてからババアのところ行こうと思って、先に東京に行く事にした。

次、何か言われたり事態が変わったときに、やっぱり物事は知っていた方が強い。

安心感もある。

そして、明日、ババアん家へ。

今日と、明日。

ここらで男隼人、気合入れて頑張らないとだよな。

なんて事を思いながら、前と同じような席にすわり、ぼんやりと外を眺める。

稲刈りしている人たちが一瞬視界に入って、瞬きをする間にはる

か後方に過ぎ去っていった。

「・・・本でも買って置けば良かったかな。」

思わず呟いて。

独り言になるんだよな、なんて辺りを見回して、誰も居ない事を確認する。

一人、がしばらくなかったからか、なんとなく違和感。

思わず呟いた言葉に返ってくる反応もなく、話し相手もない。

なんとなく手持ち無沙汰で、自分の手をじっと見る。
握って、開いて。

・・・いつか、うりもやってたな。

「まもなく、東京に入ります。」
「・・・あ。」

アナウンスと、がたん、という心地よい揺れで目を覚ます。

あれこれ考えてたり、ぼんやりとしているうちに、眠ってしまっ
たらしい。

帰り道は、何かしら本でも買って帰ろう、なんて思いながら懐か
しい景色をぼんやりとみつめて、んつと体を伸ばす。

平日の午前中ということもあってか、前よりは電車は混んでいな

い。

自由席の切符を買った俺の側にもいくつか空席がある。

「ご乗車ありがとうございます。お降りの際はー．．．。」

流れる場内アナウンス。

構内に入ると、人、人、人。

ホームの中だけあって、たくさんの人があちこちへと急いでいる。

「．．．やっぱ、人が多いな。」

小声でなんとなく呟くと、一歩。

エスカレーターに乗って、改札へと向かう。

一度改札を出て、またちょっと歩いて乗換をして。

とりあえず部屋の荷物を確認したら、弁護士に相談いかなくちゃいけないな。

「．．．。」

以前、うりときたのは、ここまでだ。

ここから先は、ジイちゃん家に行ってから、初めての領域（っていうのも大げさか。）になる。

自動改札に切符を流して、目的の線へ——．．．。

——チーン。

澄んだ音色。

——チーン。

思わず、音の主を探して構内をあちこち見回してみる。

「・・・？」

この暑い（構内はそれなりにエアコンもあるんで涼しいが・・・）中に、袈裟をまとうて深く笠を被った、お坊さん。

それが、箱のようなものを首から下げて、手にした金属の鈴みたいなものを鳴らして立っている。

「・・・珍しいな。」

足を止めて、様子を伺う。

無関心そうに通り過ぎていく人の中で、稀に幾らか小銭を入れていく人、・・・囁んだガムを包んで投げ入れる、人。

——なにやってんのー？

あ？ガムを道に捨てないで包んで捨ててんの。えらくね？

坊さんにも聞こえているであろう、会話を交わしながら通り過ぎていく人達。

「・・・。」

なんとなく、いたたまれない気持ちになって。

ポケットを探る。

指先に、小銭のあたる感触。

一步、二歩。

「・・・ども。」

なんとなく、一声かけて、その箱の中に小銭を入れる。
チーン、と鐘を鳴らして、一礼する坊さん。

カチャッ。

・・・？

思わず音の原因が気になって、じっと坊さんを見る。

「・・・よう、隼人っ！」

「・・・え？」

笠の下に、にやっと笑う口元。

髭は無く、涼しげな様子が伺える。

・・・って、俺っ！

坊さんに知り合いは、いないはず。

父ちゃん母ちゃんの葬式は俺覚えてないし、ジイちゃんの時も同じく。

かといって、声かけてくれる相手は無碍にもできない。

「あ、あー・・・えつと・・・今日は暑いですね。」

——違っだろ、俺っ！

「我だ、隼人。」

にやつと、笑って笠を脱ぐ。

坊主頭にすらつとした筋肉質な首。

「・・・えつと。」

「・・・雲野だ。」

「・・・菊乃蔵か？」

「気づかないとは、不貞の極み。精進せいっ！」

そういつて、がばつと抱きついてくる袈裟懸けの男、きくのくら うんけい 菊乃蔵雲野。

「こっくらっ！いきなりなにをっ！」

「行ったである、我はお前が一番気持ちいいんだ。」

「誤解されるよーなことをこんなところで言うなっ・・・って・・・」

誤解の無いように言っておきたい。

俗に言う、「同性愛」じゃないからなっ！？

彼の言う、「俺が一番気持ちいい」っていうのは、うまく言えねえけど、オーラ？らしい。

よく、一人暮らし先に来ては、

「ちよつと食わせろ。」

と、数時間居ては帰っていくやつだった。

まあ、バイト先で知り合った友人で、東京での数少ない俺の親友——といつてもいいと思う。

「こんなところで、なにやってんだ？」

「これも修行。」

「いや、なんの。」

「我が家が寺だと知らなかったか？」

「いや、知ってるけど。家継がないんじゃない？」

こいつは、上に兄さんが二人も居る。

都内に結構でかい家で、寺の三男坊だったはずだ。

「家は継がないが、信じるものは大事だな。」

「ふむ？」

首をかしげて、あいまいな返事を返すと。

「隼人、お前は何を信じる？」

「なんだろう？」

「だろう？ 願い事を神に祈るも在り、又、人は死ねば仏になるも在り。」

「うん、そうだな。」

「であるが故に、我はこうして修行をしているのだ。」

「いや、なんだ。」

ならば押せ。行き先を。

賽銭箱のような箱（さつき抱きつかれた時に腰にがつつり当たったのはコレだな。）をちらりとみせる、雲野。

中身は・・・さつき俺が入れた300円を含めても、1000円も無いだろう。

——ガムの包み紙やら、何やらも目立つ。

「大した稼ぎにはならないんだな？」

「いや、稼ぎが目的な訳ではない。」

「ん？」

「歩いている一般人が、いづれ死んだら我が弔いの鐘を鳴らしてやることもあるであろう？ 願いを祈る対象を守っているのも我であるともいえるな。」

「なるほどな？」

うむ、と大きく頷いて。

「俺も、いいことがありますよーにとか願うかもしれないもんな。」

「その時は、我に願うがいいぞ？」

「マジ？」

「うむ。しっかり信じて願うのがコツだ。」

コツつてあるのか、なんてちよつとびっくり。

そして、笠を俺に被せる、雲野。

「・・・なんだこれ。」

「よく見えるである。」

「普通、ああいう時って顔見えないように笠かぶるんじゃない？」

「正解だ。是をかぶる事で相手の顔も見える。我が弔ってやるかもしれない相手を見ることくらい許されるだろ。」

なるほどな、と頷いて、笠をかぶったままあちこちみまわしてみる。

外からみるとわからないが、丁度いい位置に穴が開いているらしく、しっかりと顔が見える。

「なるほど。」

そういつて、笠を返す。

受け取る彼の手の中に在るのは、・・・テープレコーダー？

「それはなんだ？」

「念仏がしっかりと吹き込まれている。」

「なんでまた？」

「相手を観察しなくてはな。集中力を維持するためにも、そのくらいは許されるだろう。第一、俺が精神込めて吹き込んだ念仏だ。」

「つまり家継ぐってことか？」

笠をぐいつと被って。

「だから、家は継がん。我の神であり、仏なるものは、我だ。信じて損はせんから我の檀家になるがよいぞ？」

「宗教始めたのか？」

「言いえて妙であるが、結果としてはそうなるかも知れんな。」

「なかなか凄い事してるんだな、難しいだろ？」

確か、宗教法人の手続きがなんとかって、あるんだよね？会社立ち上げるみたいに必要なだったような。

「いや、こうして日々過ごしているだけだ。」

「・・・え？」

「別に屋敷は要らん。ただ、考えてな。」

「ん？」

「自分の努力で物事が達成される、つまり、自分を信じねば始まらない。」

「うんうん。」

「だがしかし、一般人・凡人といわれるには特に、信じるものも必要であろつ。」

こいつが、一般人・凡人というのは別に深い意味は無い。変わった口調ではあるが、俺はこいつが結構好きなんだ。

うんうん、と頷いてみせると。

「であるが故に、我を信じてみてもよいぞ、という慈悲の心のよきなものだな。」

「なるほど。」

「まあ、追々に理解していけば良いぞ。我も未だにうまく理解させてやる自信が無いのでな。」

そういつて、テープレコーダーを懐にしまつ（巻き戻しが終わつたらしい。）雲野。

「ところで、隼人は何を？」

「いや、俺は――。」

どこから、なんと話せばいいだろう、と言葉に詰まる。

理解してくれないだろう、とかそういう不安っていうのは、無い。こいつならわかってくれるだろうし、的確なアドバイスをくれるだろうと思う。

「ちょっと話すと長くなるんだけどな。」

「構わん。久々にお前のを食わせてもらえるのならありがたい。」

「ああ、それなら。」

「こうしていろんな一般人を見てると疲れてな。やはりお前のが一番気持ちいい。」

そういつて、ふうつと息を吐く。

俺にはよくはわからないが、人のオーラとかそういう感じのものをことを言っているのはわかる。

確かに、賽銭箱の中見てもわかるように、あんまり気持ちのいい雰囲気ではないんだろう。

それに、変わり者だが頭もよく、行動力もある彼が俺のそれを褒めてくれるのは、なんていうか嬉しいもんなんだ。

「どれ、では久々の再開を祝って奢ってやろう。」

と、雲野が賽銭箱から300円（俺が入れたやつなのはあえて触れない方向で。）を取り出すと、自販機に向かい。

「さあ、どれでも好きなものを選べ。」

「お、おう。」

と、150円入れると、俺に言う。

遠慮なく、茶のボタンを押し、取り出す。

「ありがとな。」

「なに、気にするな。元はお前の金だ。」

「ま、まあな・・・?」

そういつて、カフェオレを買う雲野。

「よつと。」

雲野の隣に座り込み、話をする。

まずは、今俺が居るジイちゃん家のこと、ババアのこと。

——そして、うりのこと。

全部じゃないけど、ある程度をかいつまんで話す。

「それで、隼人はここで何をしようとしていたのだ?」

「部屋の更新のことと、・・・遺産のこととかでババアと話し合
いをするのに、一応弁護士に相談しておこうかと思ってこつちきた
んだ。」

ふむ、と頷いて懷を探る雲野。

立ち上がると、ちょいちょいと俺を手招きして向かう先は外。

「すまん、ちょっと待ってくれ。」

「いや、大丈夫・・・って、袈裟来て賽銭箱ぶらさげて笠被ってタバコ・・・。」

どうみても違和感が。

喫煙所がないので、懷から携帯灰皿を取り出して吸い始める雲野。

——その形が。

・・・巨大な酒瓶に抱きついたグラマー水着女性。

その酒瓶の上をがばと開けて使うんだが。

「どうした？」

「いや・・・その灰皿、どうしたんだ？」

「先日道で拾ってな。女体はなかなか握り心地がよいものだ。気に入っている。」

うん、と頷いて煙を吐く雲野。

「そ、そうか。」

「うむ。ところで先程の話だが。」

「ん？」

「やはり、ありえんな。すみやかにその旨告げるなり相手のババアとやらに目録なりを提示願うなり、を進言する。」

さらり、と迷っている俺に言葉をくれる。

——目録、か。

俺の遺産になるものの目録を出してもらって、話をするってことだな。

「俺を小さい頃に育ててくれたって言う事で、俺とタクは財産半分、でもって。」

ふむ、と頷く雲野。

おそろしくくつきりとした眉毛をびくつとあげて、続きを促す。

「タクが今度結婚するってことで、ジイちゃん家を改装してタクが住むって。」

「ふむ。どのくらいの血縁関係だとか、その辺も聞く必要があるが――・・。」

被っている笠の位置を直して、

「少なくとも隼人の両親の財産分については相手の言い分はおかしいだろう。」

「・・・・・だよな？」

「無論。隼人はこれからあのアパートの部屋を解約手続きをして、弁護士についていうことなのである？」

「そのつもりなんだけどな。」

ジュツとタバコを例の女体灰皿に。

パチンとフタを閉めて立ち上る煙が途切れた。

「先にアパート解約してそれで住むところが無くなったら困るしな。」

「ふむ。ババアの家とやらに泊まるのは不本意ではあるであろうが、その場合居座れる権利も隼人にあるぞ。」

「・・・かなり不本意だし、できればいきたくはないんだ。俺だ
けじゃないしな。」

うりと、ババアの家に住むくらいならテント借りるなりしたほうがずつといい。

「確かに。ならば大家の連絡先等がわかるのなら先に弁護士――
―と言いたところだが、遺産分けに当たった内容等はわかるのか？」

「・・・え？」

「どういうわけ方をしたのかわからねば、弁護士に行ったところで出直しになるぞ。」

・・・しらなかった。

確かに、そうだ。

「まあ、そう気をおとすな。」

「うん・・・。」

「お前の親戚ということだがどうなっているんだ？」

実は、俺もあんまり詳しくは知らない。

ジイちゃんと、ババアと、タクと、俺の両親のことしか。

そもそもババアだって、俺の両親が死んで、それから知ったようなもんだ。

それまでは、ジイちゃんだけが親戚だったんだ。

そう、雲野に言つと。

「それでは、行くか。」
「ん？」

すつくと立ち上がり、俺に言う。
携帯灰皿を懷にしまつと、賽銭箱をぶら下げたまま、すたすたと歩き出す。

「どこに？」

「決まつてゐるであろ、ババアの家だ。」

「え？」

「まずは書類なり物事を調べてからだ。弁護士に相談なら電話だつてできる。」

「そうなのか！？」

うむ、と頷いて。

「なにより、東京まで来なくとも弁護士は居る。もう一度調べ物をして、それから出直すなりしてもいいだろう。」

「マジ?!」

「第一、物事が片付いたのなら部屋の荷物の引き取りも業者に頼めばよい。」

さらつと言う彼の言葉に。

一気に物事が急展開した気がして、それでも、残る不安。

「もし・・・俺には遺産は入らないって言われたらって・・・。」

「案ずるな。一銭も残らないという話はない。」

「どうしても・・・。」

ぼん、と俺の肩を叩いて、雲野が言う。

「心配するのはわかる。」

「・・・うん。」

「だが、言っただである。」

「ん？」

「我に願うが良いぞ。」

そう言つて、切符売り場の前でぴたつと立ち止まり、

「で、どこまでの切符を買えば良いのだ？」

押してあるボタンは二人分、まとめ買い。
投入金額は、二万円。

「いや、・・・つて？」

「行き先を。」

「・・・雲野？」

「なんだ。ここではないのか？」

「一緒に？」

「当然である？」

当たり前だ、と首を傾げてみせる雲野。

「用事とかは？」

「今出来た。夜はジイちゃん家とやらに泊めてもらつ予定だ。」

「・・・サンキュ。なら、切符代は俺が出す。」

「遠慮するな、幸い我の家は金持ちでな。このくらいじゃ身代は揺るがん。」

「そ、そりゃ知ってるが・・・。」

そういつと、にっと笑って、隣に俺を引き寄せる。

「ならば押せ。行き先を。」

弁当

ガタンゴトン・・・ガタンゴトン・・・

規則正しく揺れる電車の音。

「ふむ、良い眺めだ。」

「だろ・・・って、ほんとに大丈夫か？」

「何がだ？」

「いや、いきなりこんな遠くまで。」

なんとなくやつぱり気がひけて聞いてみる、が。

「気にするな。何より、我が行きたいから行く。隼人が迷惑でないのなら私の好きなようにする。」

「ありがたいさ。迷惑なんかじゃない。」

「ならば、拜んでも良いぞ。」

「いや、それはまだいいや。」

差し向かいの席に座り、先ほどから何度目かの会話。

確かに、成人男性だし、ちよつと外泊くらいは構わないんだろうけど。

「しかし、のどかでよい景色だ。隼人がいるところもこんな感じか？」

「いや、もうちよつとのどかだ。」

「ほう、羨ましいな。」

切符を買って再び電車に乗る前に買ったプリンとダンゴと、肉まん。

在東京時間、何分だ・・・って位のトンボ帰りになるわけだけど、お土産は忘れちゃいけない。

なぜか、雲野までもがシュークリームを箱に詰めてもらって、賽銭箱の上に。

「シュークリーム、好きなのか？」

「好きだ。」

「そ、そっか。」

「一人で食うつもりはないぞ？泊めてもらっ礼に、ご婦人方と、うりちゃんとやらにも、勿論ある。」

てことは、つまり。

甘いものだけで土産3箱。

「甘いものは脳にも良い。」

「そうか。疲れにもいいしな。・・・って、着替えはどうするんだ？」

「案ずるな。洗濯位できなくては世の中渡れん。」

「そ、そういうもんなのか。」

カパッと賽銭箱のような箱のふたを開けて、ちらつと見せてくれる。

その中には、電池、カセットテープ、和紙に筆に硯に・・・。

いまいち統一性の無い細々としたものがあれこれと入っている。

「カセット？」

「うむ。なかなか売ってるところが少なくなって困っている。」

「CDとかMDとか多いもんな。」

「そうだ。かといって長いこと愛用しているので手放すわけにもいかなくてな。」

ガタン、と途中の停車駅で一度電車が止まる。

この次が、俺達が降りる駅だ。

丁度朝出る時に稲刈りをしていたのを見かけたのはこちら辺だったかな。

昼飯時を軽く過ぎている事を思い出し、腹が減ってくる。

「なあ、腹減らないか？」

「確かに。車内販売でもあるかと思ったが無い様だな。」

「ちよつとまつといて。俺、アレ買って来る。」

電車の停止時間は7分。

席を立つて降り口に走ると改札の側で木の箱を肩から下げて弁当を売っている人に声を掛ける。

「すいませーん！」

「はあい。」

改札を抜けてしまうわけには行かないので声を掛けて・・・思ったら。

「ああ、ニイちゃん、弁当か？いいよいいよ、電車出る前に買って来い。」

「あ、すいませんっ！」

改札のおじちゃんが板をあげてくれる。
一礼して改札を抜けて、箱の中を見る。

「うは、うまそうっ!」

「おいしいよー、好きな選んでねえ?」

目に付いたものはシメジの炊き込みご飯弁当と、栗ゴハン。
どっちもオカズが入っていて、お茶までついてる。

「コレとコレ下さい!」

「はいよう、800円ねえ。」

「あ、じゃあ丁度で。」

「はい、ありがとさんねえ。」

「頂きますっ。」

弁当を二つ受け取ると、改札のおじちゃんに礼を言って車内に戻る。

電車もここまで来ると大分人もいなくて空いているので少しくらい走っても迷惑にはならないだろう。

「ふむ。先ほどから思っただが。」

「ん? 栗ゴハンとシメジ炊き込みどっちがいい?」

「実に良いな。」

「秋の味覚って感じだよな。」

「確かにそれはそうであり、非常に食欲が沸くのであるが。」

と、雲野が言って、シメジの炊き込みご飯を選ぶ。

俺は栗ゴハンのフタを開けて、そのフタに半分ゴハンを乗せて、渡してやる。

「ほう、実に旨そうだ。ご馳走になるぞ。」
「俺にもシメジ分けてくれ。」

雲野が頷いて半分フタに乗せて寄越してくれる。
ぷーんとおこわのいい匂いがして、思わず一口。

「うめえ！」

「旨い。実に、いい味だ。」

「たまらねえなっ！」

「同感だ。そして、我が良い、といったのはお前のことだ、隼人。」

「ん？」

口の中の栗ゴハンをもごもごとやりながら問い返す。
形の良い大振りなシメジとゴハンを口に入れ、うん、と味わって
から飲み込む雲野。

「実に、良い顔をしている。」

「俺が？」

「そうだ。しばらく前にあった頃も悪いわけではないが、今に比べると遥かに悪い。」

「なんも手入れもしてねえぞ？」

「顔形だけではない。的確な表現が見つからないが、あえて聞きたいか？」

そういわれると、そりや聞きたい。

ふむ、と軽く頷いて、真面目な顔で、一言。

「我が女であつたならグツとくる、っていうやつであろうと推測

する。」

「いや、難しいぞっ!」

「どういう推測だっ、雲野っ!

「まあ、良い顔つきになっておるといっことだ。喜べ。」
「おう、ありがとなっ!」

駅について。

うまい弁当を食い終わる頃、電車は駅に着いた。
相変わらず人はまばらで静かな駅だ。

「ふむ、よい環境だ。」

「だろ？」

「すまんが食後の一服をさせてくれ。」

「あ、その箱もつてやるか？」

「いや、それには及ばん。気持ちだけありがたく受け取るとしよう。」

そういつて、箱をぶら下げたまま灰皿のある出口へ。

幾ら人が少ないとはいえ——いや、少ないから目立つのかな。
雲野の出で立ちはずがに目立つ。

「あら、お坊様だねえ。」

なんて声も聞こえて、タバコを吸っている彼に近づき、箱の中に
小銭を入れてやる人もいる。

「あいや、かたじけない。少々休憩しているので待っていただけ
ないだろうか。」

「あらあ、そうかい？」

小銭を入れてくれた人に声を掛け、タバコを消すと。

「では。」

と、改めてその人に向かって何やら祈る。

「あらあ、なんだか嬉しいねえ。得した気分よう？」

確かに、改めて面と向かって祈られる経験もそうはないもんだろ
うなー、なんて思ってたその様子を見ている、俺。

にこつと笑う人に、同じように笑顔で応える雲野。

「それでは、失礼致します。」

「はい、気をつけてねえ？」

すらりと高い身長に笠の中の顔といえぱきりつとした表情。

普通にかんりの美男子だと思うのだけど、当の本人といえぱまっ
たく気に入る様子も無く女体ライターの中身（灰皿とライター一体
型らしい。便利だろうが、危険じゃないのかっ？）を灰皿に開けて、
俺の方に戻ってくる。

「では、参ろうか。」

「だな。先に、ババアの所、でいいのか？」

「うむ。」

震えるな

「ふむ。手土産の一つでも持っていていった方がよかったのであろうか。」

「いや、いいだろう。」

「そうか、それもそうだな。」

ババアの家玄関の前。
今日はタクの車がない。

手に持った土産は、バアちゃんたちの分。

「それでは、ここに入れておくが良い。」

「お、さんきゅ。」

雲野が箱を開けてくれて、その中に土産をしまわせてもらう。

「そんじゃ・・・行くか。」

「よし。」

——ピンポン。

「はい。」

「俺です。隼人です。」

「・・・何の用。」

ドアを開ける事無く交わされる会話。
雲野が、眉をひそめる。

「先日話したことで。・・・いいですか。」

ドアを開けるとしかめ面で鬱陶しそうに俺を見る、ババア。
その視線が、雲野に移り。

「隼人、どういうことよ。」

「こちらは、俺の友人です。」

「不躰かとは思いましたが彼の家に宿泊させていただくにあたり、
一声ご挨拶をと。」

笠を脱いで挨拶をする、雲野の声を聞くや否や。

「アンタ、まだあそこにいるわけ？」

俺にそう言つと、

「アンタも、ワザワザどこから来たんだか知らないけど。あそこ
はこのバカの家じゃないの。早々に出て行つて頂戴。」

雲野に向かってそう言い放った。

かあぁと、頭に血が上るのを感じて、ぐつと拳を握る。
わざわざ来てくれた彼にも、初対面でそんな事を言うなんて。

「不躰かとは思つたが、失礼なのはそちらも同じ。言わせてもら
つてもお互い様というやつだろう。・・・まあ、不躰かと思つたの
はほんの一瞬なのだが。」

「雲野？」

ぐつと握った俺の拳を上からぼん、と手を重ねて一歩前に出る雲野。

はあ？と小さく言葉を漏らして彼の顔を見るババア。

あまりにも静かに言った彼の言葉をつまぐ飲み込めなくて、ただ息を飲む俺。

「物知らずであるように見受ける。であるが故に言葉を知らぬ物言いは仕方ないものとして。」

ババアの目を見る事無く、再び笠を被る雲野。
物知らずであるように……つてのは、ババアに向かつて。

「彼の遺産目録なりを提示していただきたい。」

「はあ？」

「以前彼は其れを申し出ているであろつ。」

「だから、あのバカにもいつてあるわよ。」

くるり、と俺に向き直る雲野。

「隼人、どうだ。」

「不満だ、と言ったはずですよ。その言い分が通るものかどうか考えてから言ってくれ、と。」

俺の言葉を聞くと、再びババアに向き直る雲野。

「と、言うわけなのだが。念のため言っておけば、後ほどその権利について法廷にでて争う準備を。」

「ちよつと……どうということよ！この間もいったはずでしょう

！アンタ何考えてんのよ！？このバカ！」

彼の言葉に逆上したかのように大声で俺に怒鳴り散らすババア。その様子をじっと見て、俺の言葉を待つように、呼吸を一拍置いて。

「隼人。」

「俺も、言っただけですが。俺の親の保険金と、家を買った分と育ててくれた分が目減りしてるのは何度も聞いてるんでまっとうな俺の分をわかるようにしてくれと。」

ジリジリするような感覚は止まない。

かといって、ケリはつけないといけない。

顔も覚えていないけど、俺の両親。

この世に産んでくれた事、感謝してる。

一緒に暮らした数年のほんの少しの思い出がある家はもうない。

すがりたい思い出の行き先も、ない。

でも、今がすげえ幸せで。

「タクが結婚するからってのはこないだ聞きました。でも、俺にも権利はあるはずだ。ジイちゃんのあの家は渡せない。買い取らないといけないのなら手続き踏むんで書類なりだしてくれと言っただけです。」

震えるな、俺。

一回くらい、ふんばらねえでどうするんだ。

「だから。」

感覚の無い指先を。

ひんやりとしてきたそれを再びぐと握りなおす。

「話し合いにならないのであれば、結果出せるところで。」

一息に、言い切る。

怒りにか、顔を赤くしたババア。

一瞬の無言の静寂の後。

「バカじゃないの？出るところ出ろっていいたいわけ？アンタみたいなバカにそんなことできるわけないでしょうが。大人しく言う事聞いてりやイイのよ。そんだけのことするのにどんだけ手間かかると思ってんの。弁護士なり出してから言えばあ？」

バシヤアツ。

顔中に、冷たい、腐ったような匂い。

相当人を小馬鹿にした素振りで、玄関の花瓶の水を俺に掛けて高笑いする、ババア。

「花も気の毒に。このような手入れもされぬ腐った水でその美しさを保てるわけも無かるう。」

俺にぶつかり、下に落ちた、花。

濁った緑の茎が透き通るように、溶けている。

一面に、独特の臭い。

「アンタもよ。部外者がしゃしゃり出てきて。名誉毀損で訴えてやるから。」

雲野に、フン、と鼻を鳴らして言うババア。

わざわざつき合わせて、その上これ以上雲野にまで迷惑かけるわけには・・・。

「それは――。」「その言葉、まずは己の行いを省みてから言うが良からう。」

俺の言葉を遮って、雲野がババアに口を開く。

今まで、こいつが人の言葉を遮った事なんてない。そのことに驚いて、思わず口をつぐむ、俺。

「隼人。」

「・・・ん。」

「我を信じる。」

そう言う、雲野。

キキッ。

表に、車のブレーキ音。

重低音と共に漏れ聞こえるリズムの音。

「ハイハイ、仲がよろしくて結構なこと。今の失礼は慰謝料としてさっぴかせてもらうから。とつとと帰って頂戴。」

勝ち誇ったように笑うババアと。

「なんだよ、お前まだ居るのかよ。」

背後から、タク。

思わず、弱気になりそうな、何もかも嫌になりそうな、嫌な自分が出て来そうになって。

それを止めてくれたのは。

我を、信じる。

笠越しに見える、雲野の目。

再び

「では、早々に用意されよ。不本意だろうが親戚という事もある。なるべく穏やかにすませたいのが気持ちだろう。」

「だから、いい加減理解しなさいよ。」

「ちなみに、不本意、というのは隼人にとってだ。勘違いするな。」

「は？なにコイツ。バカのツレはやっぱりバカって訳？」

タクがそういうのを、涼やかに鼻で笑う雲野。

「よくわかつているではないか。礼儀知らずの息子はやはり礼儀知らずと見える。」

「・・・なっ！」

「何か。」

「なんなんだよ teme！元はといえば人の家の財産だろうが！勝手にバカが入り込んで出ていかなえ？ふざけんじゃねえよ！」

がばつと雲野の袈裟を煽るようにひねり上げるタク。

やめろ、と俺が手を出すより早く。

「これは、驚いた。」

「はあ？」

「少しは言葉を知っているようだが・・・理解力というものがついていかないとここまで滑稽で哀れを誘うものだとは。」

心底哀れんだ目でタクを見る雲野。

拳を振り上げて今にも襲い掛かりそうなタクの腕を後から俺が握

って、言う。

「ジイちゃん家買い取るのに必要なこととかがあればそれを出してくれ。あとはこの間言ったように、正式な俺の受け取り分を。」

「テメエは横から口出すんじゃないよ、このバカ。」

「まともに話ができねえなら裁判でケリつけてもらうから。」

「はあ？このバカ、あそこは取り壊すっていつてるだろーが。」

取り壊されるなんて、冗談じゃない。

雲野の袈裟を捲り上げていた手を放すと俺に向き直るタク。

「それは聞けないって何度も言っただけだ。」

「だから何で俺がテメエの言う事聞いてやらねーと？」

「隼人。用件は告げた。あまり近寄るな。バカが伝染る。」

そう言っ、俺の腕をつかみ、タクから手を放させる。

睨み付けるタクと、心底バカにした顔で見下すババア。

「用件を聞き入れていただけない場合は、話し合いはここではなく、別の場所で。」

「ふざけんなバカ。こっちの台詞だボケ。」

言い返してくるのを聞かずに、俺を帰り道に促す。

それに従って庭から外へ。

「雲野……。」

ババアの家をでて、一つ目の曲がり角を過ぎて。

「ごめん。」

彼に声を掛ける。

ここにきて、早々にこんなに不愉快な思い。

色々言ってくれた彼に、俺は大したことも出来ず。

「どうした？ジイちゃん家に泊めてくれる約束がダメになったか？」

「いや、それは問題ない。嫌な思いをさせたことを、謝りたい。」

ふつと立ち止まり、俺に向き直る雲野。

「なんだ、我を信じていないのか？」

「ん？」

「言つたであらう。我はお前が一番気持ちよいのだと。信じろと。」

「でも。」

いくらなんでも、いきなりあのババアとタク。

不愉快であつたことには違いない。

もつと俺が前面にでて何か言ふなり、するべきだったのに。

「良いか。隼人。お前は信じている。」

「。。。。」

「何を気に病む？我は何も気にはしていないのだが。」

「ごめん。信じてる。」

にっ　と　笑　う、　雲　野。

「道端で恋人の会話のようだぞ。聞かれては誤解を受けるかもしれないな。」

「ってっ！？」

「冗談だ。」

「冗談か。」

「まあ、気に病むな。少なくとも我は楽しんでいるぞ。」

そういつと、再び歩き出した。

視線が

垣根を越えて。

庭の畑にいるミヨコさんとバアちゃんと、うり。

思わず、なんだかほっとして顔が緩む。

「ただいまー！」

声をかけると、三人同時に顔を上げる。

「おかえりい、はやかっただねえ。」「おかえりい？」

声を掛けてくれるミヨコさんとバアちゃん。
そして。

「あやとっ！」

一目散に俺に向かって走ってくる、うり。
畝を越えて、ぱたぱた足音を鳴らして。

「うり、ただいまっ。」

「おじゃえりい！」

ぎゅうっと抱きついてくるのを、抱き上げてやる。
雲野と一緒に、バアちゃんとミヨコさんのすぐ側まで行くと。

「お世話様でした、お土産あるんでお茶にしましょうっ！」

と縁側へ誘う。

「そして、こちら、俺の友人の雲野です。」

「どうも、始めまして。菊乃蔵 雲野といいます。」

と、笠を脱いでぺこり、と頭を下げる。

袈裟をまとつて箱をぶら下げた彼に驚くか、と思っただけど、
んつと立ち上がって腰を伸ばすいつもの笑顔でにっこり笑いかける、バアちゃんとミヨコさん。

そして、じーっと、視線が雲野な、うり。

畑から縁側に戻り、手を洗うと荷物を下ろす。

ミヨコさんとバアちゃんが熱い茶を入れてくれるのに甘えて、お土産を出す。

雲野が買ってくれたシュークリームを人数分並べて、俺が買ってきたものも一堂に並べて。

「んじゃ、先に紹介な？雲野、こちら、バアちゃんとミヨコさん。」

「よろしくねえ？」

「お坊さんなんだねえ、いいことだねえ。」

「今後ともよろしくお願いいたします。」

うりを、どう紹介しようか、と一呼吸。

「で、そちらの可愛いお嬢さんが、うり嬢、だな？」

「！！！！！！」

先に雲野が、シュークリームに釘付けになっているうりを見る。
驚いたのは、バアちゃん、ミヨコさん、そして何より、俺。

いきなり見えるとはさすがに思わなくて。

まずは紹介して、それから見えたら、って思っていたのに。

「雲野、見えるのか？」

「可愛い。ハナシには聞いていたが想像以上だな。」

「うーっ」

その頭をなでなで、と目を細めて優しく撫でてやる雲野に嬉しそうに頭を摺り寄せるうり。

「あれえ、よかったねえ？」

驚いたものの、同じように嬉しそうに笑うバアちゃんとミヨコさん。
ん。

俺は、といえば。

いや、こいつなら、とは思っていたけど余りにもあっさりと、で
思わず言葉がでてこない。

「それでは、頂こうか。お茶が実に良い香りだ。」

「いいねえ、それじゃ早速いただくよう？」

「あ、食べてください。」

驚いたものの、悪いことなんかじゃなくて、むしろ幸せで。

「いやぁー、おいしいもんだねええ。ミヨちゃんびっくりしちゃ
うよう。」

「うまあっ!」

旨そうに俺と雲野からの土産に喜んでくれているバァちゃんとミ
ヨコさんとうりに、同じように涼やかに頷きながらシュークリーム
を食べる雲野。

なんか、いいなあ、なんて思っ

さっきまでのギスギスした気持ちみたいのとかが溶けて行くの
を感じて、俺もシュークリームに手を伸ばした。

風呂場で数数えて

「それじゃあ、バアちゃん帰るからねえ？」

「またねえー？」

食べながらあれこれ話をして、気がつけば夕方の風。あたりが薄暗くなると寒さも増すような気がする。

「ほんと、今日はありがとうございました！」

「ごじやいあた！」

「お世話になりました。」

二人にお土産を渡して三人で垣根までバアちゃんとミヨコさんを見送る。

今日一日で畑に苗を植えてくれて、風呂は沸いてて、おまけに晩飯まで作っておいてくれた、バアちゃんとミヨコさん。

ぷうん、といい匂いが台所からしていて、かなり嬉しい。

しかも、風呂場からは湯気が。

「それじゃ、うり、雲野、風呂でも入るか！」

「あい！」

「おお、ありがたい。」

俺と、雲野の真ん中で、手をつないでぶらぶらと空中浮遊してい

るうり。

「うり、もう名前覚えたか？」

「う？」

「菊乃蔵 雲野だ。うり嬢、よろしく。」

「きくのーらっけー？」

ぶらぶらと揺れながら、雲野に続くうりとするうり。
・・・が、ちよつと発音難しいかな。

「菊ちゃん、でもよいぞ？」

「ぶっ！」

うりに言う雲野に、思わず噴出す。

き、き、・・・菊ちゃん・・・か・・・。

「いーくーちゃ？」

「うむ、なかなか良いものだな。」

「いくちゃあ、あやと、いしょ？」

くりつと顔をあげて俺と雲野を交互に見る、うり。

「おう、三人で風呂入ろうなー？」

「久々だな。」

「おおおおー！」

そういえば、雲野と風呂入ったのって、昔アパート断水になった
ときについでに一緒に銭湯行った時以来だな。

「おーうーでいーくちゃーやとー」

ぶらんぶらん、と揺れるのがとても気に入ったらしく、体を揺らしてまた怪しげな歌を歌う、うり。

それを目を細めて嬉しそうに見つめる雲野。

「よし、んじゃ服脱いでー、風呂場突撃、合図行くぞー!」

「あいっ!」

「脱ぐのなら任せておけ。」

うりを下ろすと、居間の隣の部屋へ。

ここから廊下を抜けて風呂場まではまっすぐだ。

「雲野、風呂場はわかるな?」

「無論。土地勘には自信がある。」

「っじゃー!」

にやり、と笑う雲野。

うん、手加減はいらないな。

「3・2・1・ゴー!」

俺が叫ぶと、バツと袈裟を脱ぐ、雲野。

絶対一番だと思っていたのに!?!と慌ててシャツを脱ぐ俺。

「・・・もっ!・・・じゃー!」

「もじゃっ!?!」

じたばたしながらワンピースを脱ぐ（頭に引っかかっているが。）
うり。

ばたばたと足を踏み鳴らして頭を振るがなかなか抜けないらしく。

「あー・・・うー!!」

・・・自分で自分もちあげる勢いだぞ、うりっ!?

「つかー、やっぱり風呂はいいなあ。」

風呂に浸かって、星を眺める。

そこまで極端に広い風呂な訳じゃないけど、大人二人に子供一人位ならなんの問題もない。

「実に快適だ。眺めは良い。吹く風は心地よい。」
「いーねー?」

大きな窓をいつも開けて入るもんで、星は見れるし風も気持ちいい。

俺の膝に乗って、風呂の減りに掴まって気持ちよさそうに揺れているうり。

「しっかりあったまったかー?」

「おう。」

「あいっ!」

いつもの風呂の、儀式、ってほど大げさじゃねえけど。

「そんじゃ、いくぞー？」

「ん？」

「あいっ！」

右手をあげて、げんきよく返事をするつりをみて、じつと様子を伺う雲野。

「いち。にーい。」

俺が言つと。

「はーん、しーい、ごっ！」

続くうり。

それをみて、ふむ、と頷き、にっと笑って数に続く、雲野。

「六、七、八！」

晩飯

「雲罨、服これかしてやる。風呂上りに着る服ないだろ？」

「いや、ありがたいのだが着替えの一枚くらいは持っている。」

「・・・いつも持ち歩いているのか？」

今日は夜とはいえ、そう寒くは無い。

むしろ、まだ半そででもいい位の暑さ、ってやつかな。

「よし。これでいい。」

そういうと、甚平を着込んで満足げに茶を飲む雲罨。

うりはー・・・というと。

「うり、それどうした？」

「あいっ！」

きせてくれー、という感じでもってきたのは上から被る七部袖のワンピース。

赤い色をした、パジャマになりそうなやわらかい素材のそれ。

そろそろうりの服もかってやらないとなー、なんて思っていた矢先だ。

「あーちゃ、いーよちゃ、あいって？」

「おー、もらったのか！よかったなー？そんじゃ、服着るから両腕ばんざーい！」

「はんじゃー！」

犯罪、じゃないので、念のためっ！

うりに服を着せて、俺も軽くＴシャツを。

風呂上りに水分とって、三人で晩飯をとる。

「・・・すつげえ豪華だ！」

「ごーかー！」

「実に好ましい。」

鍋ごともってきたのは、肉じゃがと、サトイモを煮たもの。
それから漬物三種類ときのこの炊き込みご飯。
それにあわせて山芋の磯辺揚げとか、もう俺の好物っ！

「そんじゃ・・・いただきますっ！」

「たーきあしゅ！」

「頂きます。」

向かい合って、ランプの明かりで取る夕食。

これで何回目かな、なんて思っふと庭を見る。

「どうした？」

「いや、なんとなくさ。・・・あ、後で紹介する、えこ。」

「えこ？」

「えこしゃーんっ」

そついや今日はまだ声聞いてないな。
飯終わったらミルクとかもって行ってやろつ。

「ちっちゃい猫がいるんだよ。名前は、えこ。」

「ほう、地球に優しそうな猫だな。」

「えこしゃーん、にあーって、すうの！」

「ほう、子猫か、実に良いな。」

さくつと磯辺揚げを頬張って、口の中に広がる幸せに顔が緩む俺。
そんな俺の様子を見て、同じように真似をするつり。

「しかし、雲野、今日はありがとな。」

「いやなに、我も楽しかったぞ。」

「う？」

つりが、不思議そうに首をかしげ（つつも口の中はみっちりなに
やらつまっている。）俺と雲野をじっとみる。

「。。。。。」

そつと磯辺揚げをつまんで、さらにつりに近づける雲野。

「んあ。」

さらに口を開けるかうりっ！

「。。。。。」

なんだその嬉しそうな顔は雲野っ！

はむはむ、と箸から磯辺揚げを口の中に格納していくうり。
一体どんだけつまってるんだ・・・？

「いやー、食った食った！マジうまかったなあ。」

「うまー」

「実に良い食事であつた。」

明日の朝にも回せる分あるから、明日はこれと畑から何か取って
こよう。

ほんと旨かつたな、晩飯。

「隼人。」

「ん？」

「あのタクとやら。結婚するといっていたが。」

「・・・ああ、・・・子供出来たから、ここ取り壊して家建てる
って言つてた・・・。」

うん、そうなんだよな。

俺はここにいたい。

でも、子供出来たって事は、タクだけじゃなくて、相手の嫁さん
とか、子供とかもいるわけで。

俺がワガママでここに居座りたいっていうのは、・・・確かに迷
惑なんだろうな・・・。

「しかし、我にはどう聞いても子供がいるようには思えないのだ

が。」

「……ん？」

「先程のタクとやらの車。タバコの臭いが異常であった。妊娠している女性を乗せているにはいささか疑惑がな。」

「なるほど。……彼女も吸うとか？」

確かに、車の近く通っただけで窓から漏れ出てくる臭いがかかなりきつかった。

まあ、人それぞれなのかもしれないし、よくはわからない。

「それに——と、うり嬢が睡魔に襲われているようだ。」

「ん？……うり？」

「……むー。」

俺の膝に乗って、うつらうつらと船を漕いでいる。

うん、確かに相当眠そうだ。

昼間一杯遊んでもらったんだろうな。

「うり、眠いか？」

「ちやー……。」

「……うん、眠いんだな。んじゃ、えこにミルクだけ置いて、うり、寝るか？」

「こしやー。」

「うん、えこしやん、な？」

えこのところまで連れて行こうかちょこつと迷う。

「んー……。」

外にちらつと顔を出してみる。

さすがに夜も少し遅くなると寒いよなー・・・風邪引かせてもな
んだし、一人でいくか。

「うり嬢は我が布団まで運んでおこつ。」

「お、頼む。」

膝からうりを抱き上げる雲野。

むー、とか一瞬寝言を言つて、大人しく抱かれて（てか、意識な
いな。）布団へ運ばれるうり。

俺は、皿にミルクとかを準備して、えこの所（いや、固定してい
るとこ決まってるわけじゃないが。）へ向かう。

布団を暖めて

「んー・・・やっぱ、いないかな。」

あちこち見回してみるも、姿はみえない。

とはいえ、やっぱ夜は冷えるな、えこ、どこで寝てるんだろ。

「来てない訳じゃないな？」

昨日少しこぼれていたエサはキレイになくなって。
たまたま時間が合わないのかな・・・っと。

きらつと光る目。

小さな体。

「えこ？」

「にゃーん。」

手に持っていた皿を下ろしてやる。

ひゅうつと吹く風が風呂上りしばらくたった体に冷たい。

「・・・まだ、家の中入るの怖いだろうしなー・・・、一応縁側の
のどこ開いてるから、寒かったら入って来いよ？」

かりかり。

「なんなら家のなかで飯くうか？」

・・・かりかり。

一瞬俺を見上げて、軽く小首をかしげてまたエサを食べる、えこ。
無理やりつれてくのもなんだし、入ってくるの待つしかないな。
・・・。

手を伸ばしてみて、やっぱり逃げられる。

食事の邪魔するのもなんだな、と思って、俺も居間へ戻る。

「うり嬢は完全に眠りに落ちた。」

「お、さんきゅ。」

居間に戻ると、雲野が一人茶を飲んでいる。

「ビールでも買ってくれば良かったかな。」

「いや、気にするな。茶は好きだ。」

そういつて、俺にも茶をすすめてくれる。

耳を澄ますと、微かにえこがかりかりとエサを食べる音。
いつか一緒に眠れたらいいな、なんて思つて、ふと。

「雲野。」

「菊ちゃん、でもよいのだが。」

「いや、雲野でつ。」

「そうか。」

突然の提案にびっくりして、何を言おうとしていたのか忘れる。
・・・なんだっけ。

・・・あ。

「ここ、いつまで居られる？」

「特に決まっではないない。隼人に不都合がなければな。」

「俺はかなりありがたいんだが、本当に家とか平気か？」

「うむ。身代は揺るがぬ。」

「そつか。んじゃ安心していいな？」

「安心しろ。」

そういつて、二杯目の茶を注ぐ雲野。

きつちり姿勢を正して、まるで茶席（行つたことないけど。）みたいだなー、なんて思つて思わず見とれる。

そして、しばらくずっと雲野も一緒につてことになんか嬉しくてここに、・・・って、そうだ。

「雲野、さっきの続きだけど。」

「どうした。」

「タクの子供の。」

「・・・隼人、うり嬢が寒そうだぞ、ちよつと布団を掛けてやる事を進言する。」

「あ、マジ？ちよつといつてくる。」

「我も一服すませてくる。」

そういつて、袈裟を羽織ると立ち上がる雲野。

「いや、風邪引くとなんだし、中がかまわないぞ？」

「せつかくの夜なんでな、少し見て回りたいのだ。」

「そうか？んじゃ、ランプかしてやる。」

箱をまた首から下げて。

「あいや、それには及ばん。少々遅くなるかもしれんので先に寝ていろ。」

「いや、待つてるさ。」

「我は暖かい布団を所望する。先に暖めておいてくれないと、人肌ということになるが?」

なんてことをさらっと言つてのける。

「お、おっけっすっ!」

思わずどもる、俺。

「では、頼んだ。」

「お、おっす。」

闇夜の秘め事

「さて、と。」

さくつ。

アスファルトに響いていた下駄の音。

軽やかな音が気に入っていたのだが、地面で音を立てず静かなのが今はありがたい。

ふうつと吐き出す煙がうつすらと月明かりに照らされてほんのりと紫がかって見える。

「紫煙、とはよく言ったものだ。なかなか風流だな。」

愛用の女体灰皿に灰を落とす。

耳に手をやり、箱の中に手を入れると、何かのスイッチを入れる。

——ザー…………

しばらくの無音の後。

——…………たく、先にはらってくれりやいいのにあのケチ。

なーにが「お前腹でてるからそのままでもいいわ。」よ。人をバカにするのもほどがあるわよね。

カチツ…………ジリ…………

「ふむ、思いのほかクリアだ。」

再び手元のつまみをあわせて何やら調整をする。

女体灰皿を裏返し、某所をおすと、ぴかっと思いのほか明るい光。

——「あー、マジ感じワリイ。」

「なにー？」

「あのバカだよ。バカがよー、もう一人こきたねえ坊主連れてきやがってあれこれエラそーに文句垂れやがって。」

小汚いつもりは無いのだが。
と呟きかけて黙る。

——「んで結局どうなるの？」

「ああ？だからおめえはバカでトロイって言われんだよ。」

「ちよっとなによそれ。」

「いいか？いつまでもあそこにボロ家があるからワリイんだろ？クソ共が住み着いちまう。」

キキツ。

「あー、あぶね。出てくんじゃねえっての、轢き殺しでもしたら車が汚れるだろーが？」

「ほんとガキって頭悪いわよねえ。」

頭が悪いのはお前達だろう、と再びまた呟きかけてやめる。
BGMにかかっている音楽が酷く耳障りだが仕方ない。

――「あー、そうそう、そんなわけだよ。」
「うん。」

「勝手に住み着かれても迷惑だし、どうせあそこは取り壊すんだしよ。」

「あー、そういつてたわね。」

「おまえしっかりやれよ。デブ。」

「ちよっと、デブっていわないでよ！」

「あ？金払ってやってんのはこっちだぜ？立場考えて物言えよ。」

「

なるほどな、やはり。

声に出さずに頷いて、居間の方を振り返る。

ランプとロウソクの明かりが見える。

そして、隼人の影。

真っ黒い袈裟を着ているので向こうから此方の影が見えることは無いだろう。

じっと座っているのが、隣の部屋に移動して、再び座る。

――「つかさー、それやばくない？」

「どうせ取り壊すんだっていつてんだろ？それが燃えちまった所で手間が省けるだけじゃん。」

「えー、なんか面倒そうなんだけど。」

「うるせえよデブ、大人しくついてくりゃいいんだよ。」

しっかりと聞こえてくる会話。

サー、という微かな機会音。

懐にしまつてあるテープレコーダー。

「・・・さて、どうしたものか。」

ジジ、と微かに音を立ててタバコを消す。

「別に中で吸つても構わないんだけどな。」

冬になったら寒いだろうし。

それにここ風通しもいい。

「しかし、どこまで行つたんだ？明かり無くて見えるのか？」

ぼんやり、と庭を眺める。

既にどこに彼が居るのかも見えない。

「白い服きてもらえばまだわかるんだけどな・・・って、そんな袈裟あるのかな。」

想像して、うーん、と首を振る。

かすかにちらつとなにかが光つたような気がする。

ライターかな、なんて思つて、茶をすすする。

あ、うり、ちゃんと布団被ってるかな。

ふと気になって寝顔を見に行く。

「あー、見にきてよかったな。」

くすつと笑うと布団を掛けなおしてやる。

「一杯遊んでもらったんだな、よく寝てる。」

くーくー、と小さな寝息を感じて、隣に座ってその頭を撫でてやる。

そっぴや、今日は本読んでやらなかったな、明日は読んでやるかな、なんて思う。

「隼人はまだ起きているようだな。」

先ほど座り込んだ影が見えて以来動いた様子がない。
体を起こしたまま寝るといふのなら別だが。

すっかり布団の上に座っているあたり、温めてくれているのだろう。

——ザー……

「……寝てもらうか。」

一言呟くと、居間へと戻る。

静かな夜と気配

「隼人。」

「お。早かったな。」

居間に雲野の姿を見つけて、布団の上から居間へ移動する、隼人。うり嬢は完全に夢の中のようだ。小さな握った手がかすかにぴくつとするのが見える。

「うむ。言い忘れていたのだが、やっぱり先に寝てくれ。」

「ん？」

「我はこの時間は修行なのだ。」

「疲れてないか？何か手伝おうか？」

そついいながら茶を勧めてくれる。話すべきか、と一瞬迷う、が。

「いや、大丈夫だ。少々時間がかかるので先に寝ていてくれるとありがたい。」

「あ、気が散っちまうか、悪い。ランプはつけておくから帰りの目印にしてくれな？」

「すまない。感謝する。」

「んじゃ、先に布団いくから。茶はそこにおいておくな。」

「うむ。良い夢を。」

片手を挙げてにこやかに笑うと隼人が隣の部屋へ。

一口、茶を頂く。

程よい適温で実にうまい。

うまい茶はほんのりと甘みを後味に感じさせて、吐息にまで爽やかな香りが残る。

・・・と。

いかん。つい旨い茶に和んでしまつところであつた。

しかし、せつかくの茶を頂かずに行くのは愚かというものの、くいと頂いていこう。

うむ。やはり旨い。

・・・これは器ごと頂いていこう。

外に出て、再び一服。

ぐるつと一回り家の周りを歩いてみる。

外灯が無いとはいえ、まったくみえないわけではない。星の明かりと月のとで、歩けない事もない。

「ふむ。」

再び手元のスイッチを入れる。

耳の中にダイレクトに響く、雑音と、声。

――「マジでやるのー？なんかコワイんだけど。」

「バーカ、どうせ取り壊すんだから手間が省けていいじゃん。」

「つーか人がいたらどうすんの？」

「あ？知るかよ。テキトーに逃げんだろ。」

ガサゴソと物音が続く。

「愚かよな。」

ぼそり、と呟く。

「先程の様子からして阿呆だとは思っていたが、ここまでの阿呆だとは。」

にゃーん。

小さく聞こえる声。

そっぴいえば隼人が「えこ」と呼んでいた。

腹が膨れて、眠くなったのだろうか。

「えこ殿。よろしければ中へ。外は少々危険だと思われる。」

にゃーん。

カサツ、と足音。

出来れば中に、隼人の所にいつてもらいたい。

様子を伺ってみるが、姿を見つけることができない。

「そちらの明かりがあるところから中に入れる。では。」

念のため言うと、再び順路を辿る。

玄関の横、外から見える通り、薪が積んである裏口。

家の裏には林があり、横と前に道路が通っている、彼の家。

一通り一周して、目星をつける。

「ふむ、ここいらであろうか。」

立ち止まるのは、表より少々歩いた裏口の薪の山。

程よく表からは見えない、影がある。

——「ゴトッ。」

「ちよつと、臭いんだけどー。」

「うるせーな、静かにしろよ。」

ならば、その五月蠅いBGMをきってはどうか、と思うのだが。

・・・音がだいぶクリアになってきたな。

どうやら、近い距離と推測。

——「車どこにとめっかな。」

「待ってるから一人で行ってきてよ。」

「あ？誰がこれ持つんだよ？」

「一応妊婦ってことなんでしょ？だったらアンタもてばいいじゃない。」

うむ。女性に重い物を持たせるのは宜しくない。

しかし、嘘も宜しくない。

我も、嘘をついているのだが。

しかし、やはり夜は若干冷えるものだな。

薪が置いてある場所より少々離れた、木陰。

ただ座っているのも尻が冷える・・・が、かといってここで筋肉を鍛える運動というのも宜しくない。

故に、ただ黙って座っているのだが。

耳の中に差し込んである機械から、音量を限界まで小さく絞って聞こえてくる音。

雑音は殆どなく、そのため耳元で囁かれているような感覚にも似ている。

（しかし、不愉快な人物の不愉快な会話を、というのは色気も何も無いな。）

声に出さずに、ふと思う。

——「ねえ、マジでいくの？」

「しつけない、こんな夜中にクソ田舎で起きてるヤツなんかいねえって！」

「マジ、面倒事巻き込まれるんだったらもうちよつとさー？」

「わかったよ、後1万つけてやるよ！」

「あ、そう？」

「ああ、んじゃいくぞ、ホラ。それもってこいよな。」

「わかったわよっ！」

ガチャ。

ガタゴト、と低い物音。

そして微かに聞こえるが、何を言っているのかまでは判別できない会話。

「・・・来るな。」

思わず口に出して、後悔する、が。

（聞こえる距離ではないだろう。）

ガチャ、という音すら、左耳の中でのみ。
ほっと安心して、息を吐く。

えこ殿は、いつもこのような音を聞いて、寝ているのだろうか、と静かに聞こえる虫の声に、ふと思う。
耳に心地よい、虫の声。

それがより一層静寂を引き立てていて、実に風流だ。
であるが故に。

——ガサッ。

人の気配にも気づきやすいというもの。

平和的口封じ

「マジおもいんだけどー。」

「バカ、黙ってるよ!」

ちやぶ。

小声のつもりなのだろうが。

この静寂の中では酷く耳につく。

しかし、このちやぶ、という音。

そしてこの風景に不似合いな臭い。

風下にいるからか、香水に混じって煙草の臭いと、・・・石油の臭い。

「ほら、そこにあんだろ。新聞紙・・・ってバカ!音たてんじゃねえよ!」

ビリビリ、と新聞紙を破く音がして、途絶える。
ちっ、と舌打ちをする音。

「こんだけありや余裕だろ。」

「あー、臭い。」

ぶんぶんとして漂ってくる石油の匂い。

トクトク・・・と音を立てて液体が流れ出る音。

「ほら、そこの薪にも。」

「わかつてるわよ。」

先ほど風呂に入ったときを思い出す。
・・・が、まだだ。
今動いては元も子もない。

「んじゃ、やるぞ。」

「さっさとやって早いとこ帰りたいわ。」

カチッ。

カチッ・・・。

「・・・ちつ、使えねえ。お前ライター貸せよ。」

「もう・・・。はい。」

カチッ。

石油がついた新聞紙。
燃え上がるのは間違いなく早い。
もう少し待つべきかもしれない・・・が、ここに何かあってから
では遅すぎる。

「いくぞ。」

「はやくしてよ。」

——カシャッ！

一面に目がくらむフラッシュ。

「！！！！！」

「きゃああああ！」

——カシャッ！

「ちょ、なんだ！？」

「やめてええ！」

ボツ！

タクが持っていたライターに新聞紙が引火して激しく燃え上がる。

「うわあああ！」

「なんなのよー！！！！！」

慌てて手放したそれが風に煽られて地面に落下する。

「逃げろ！」

「ちよっと！おいてかないでよ！！！！！！！」

——カシャッ！

走り出す二人を追いかけるか迷う——が、万が一の事があつては・

・・。

万が一薪に燃え移って広がりでもしては元も子もない。

・・・と。

「雲野！？無事か！？」

「・・・隼人？ここを頼む、火を消してくれ、石油かかってるから気をつける！」

さすがに騒ぎが大きかったか、隼人の声が近づいてくる。走りながら叫ぶのは効率の良いものではないが仕方ない、非常時だ。

「どうしたっ？」

「戻ったら説明するので、ここを頼む。」

「・・・わかった！」

物分りの良い友人で実に何よりだ。

車を停めた位置も掴んである。

田舎道を走るに不向きなヒールの女に追いつくのは容易い。ただ、走るだけだ。

「・・・つきゃ！」

畝に足を取られて派手に転倒した女の腕を掴んで引き起こす。

「ちょ、ちよつと！タク！！！！」

振り返ることも無く走り去る男の名を呼ぶ、女。

「おいてくつもりっ！？ねえっ！！！」

掴まれた腕をぶんぶんと振って抵抗するが、逃がすわけには行かない。

——。。。

ボタンッ！

静かな夜に響く、ドアの閉まる音。

「ちょ……まってよ……！！？」

エンジン音と共に不似合いな漏れ出る音楽。

「ねえ！タク！」

ブロロオオッ！！！！

「うそ……でしょ……？」

掴んだ腕から力が抜けていくのがわかる。

思わず手を緩めると、するつと我の手から離れ、支えを失ったかのように再び畑に座り込む、女。

そして、ほのかに漂ってくる、排気ガスの臭い。

「女、来るが良い。」

「……あたしやってないからね！」

「まずは此方に来るが良い。」

「まだ金だつてもらつてないんだから！」

「どうやら怪我はないようだな。自力で立てるのなら手助けはせぬが。」

「警察呼んだつて何もしやべらないからね！アタシは声かけられただけよ！」

会話がかみ合わない事を理解する。

興奮しているのもあるのであろうが、悪びれる様子も無いというのは如何な物か。

まずは隼人の元へ戻らねばなるまい。

「——っえ・・・うー。」

「・・・？」

微かに聞こえた泣き声。

気のせいかと耳をそばだてる。

念の為、側に座り込んだ女を見る——が、目が合うなり。

「何見てんのよ！アタシ悪くないからね！」

と、悪態をついてくる始末。

「少々黙られよ。」

「なによ！大体あんたらが！」

「平和的に口を塞ぐ方法を一つしか知らんだ。」

「は？何言つてんのっ！？」

また、微かに声が聞こえた気がする。

「ちよつと！聞いてんの！？」

「黙られよ。さもなくば」

「なっ」

——やとー…いうっちゃあ…——

静まり返った庭にかすかに届く声。

「うり嬢！」

「……っ。」

顔を上げ、力なく座り込んだ手元の女を離す。

この騒ぎで起こしてしまったのだろう。

心細げに泣いている声、うり嬢の物に相違ない。

「うり！」

隼人の声が聞こえる。

火は完全に消し止めたらしく、彼の声がする辺りは完全な暗闇に染まっている。

「やとー！いくちゃー！」

居間のランプの光に照らされて、隼人がうり嬢を抱き上げてやるのが僅かに見えた。

そして、ランプを左右に掲げ、辺りを照らし。

「雲野！大丈夫か！？」

隼人が叫ぶ。

手元の女と一瞬目があう、が、さっと視線をそらされる。

「ここだ。」

手を振って隼人に応えると、此方に向かってうり嬢と共に歩いてくる。

ふうん、と吹く風に乗って匂う石油の臭いさえなければ、秋の夜に相應しい満月。

風に雲が流されたおかげで、ランプがなくても辺りの様子が伺える。

「隼人、怪我はないか？」

「ああ、俺は平気だ。雲野は大丈夫か？」

「うむ。うり嬢、起こしてしまつて申し訳ない。」

隼人にしがみついているうり嬢の頬をなでてやる。

にこーっと微笑んでくれるのに安心して思わずつられて笑顔になる。

「説明、よいだろうか。」

「あ、ああ。頼む。」

「では、中に戻るとしよう。」

「ああ。」

座り込んでいる女に手を差し伸べる。

「・・・・・・・・。」

無言で私の顔を凝視し、手を見つめ、掴まる女。
それを起こしてやると、隼人、うり嬢と共に居間に戻る。

わがまま

「雲野、本当にケガはないんだな？」

心配そうに我を見る隼人。

「うむ。黙っていてすまなかった。」

「ん？」

「昼間の様子でな、何かしら行動を起こすのではないかと思っ
な。」

ガチャ、と箱を開ける。

中から小型のテープレコーダーを取り出してみせる。

「ん、念仏入ってるやつだろ？」

耳の中に入れてあったイヤホンをはずし、ほんの少し巻き戻して
テープレコーダーから直に再生してみせる。

――「ねえ、マジでいくの？」

「しつけない、こんな夜中にクソ田舎で起きてるヤツなんかい
ねえって！」

「マジ、面倒事巻き込まれるんだったらもうちよつとさー？」

「わかったよ、後1万つけてやるよ！」

「あ、そう？」

「ああ、んじゃいくぞ、ホラ。それもってこいよな。」

「わかったわよっ！」

「!？」

驚いた様子の女。

「これ・・・どこに？」

同じく、隼人。

「車の窓ガラスにだ。あれだけスモークを張ってあるタイプの車でそう窓を開けるとは思えなかったのな。」

「なるほど・・・。」

「親戚ということもあるだろうし、黙っているか、言うべきか迷ったのだが、できれば黙ってすませられればと思っていたのだが――すまなかった。」

「いや、そんなことないぞっ！」

頭を下げようとする我を抑える隼人と、我の膝に乗ろうとするうり嬢。

「しかし、なんで今日って？」

「いや、昼間の様子をみてな。状況が不利になりそうとみて、大抵行動を起こすのではないかと思ったのだ。」

「バレバレだったって訳じゃん・・・。」

呟く女。

「って、タクの嫁さん、だよな？体平気なのか？」

「……。」

ふと思い出したように隼人が声を掛けてやる、が無言でうつむく女。

「体冷やすと子供に悪いって聞いた事ある。とりあえずあったかいもんでも飲んでな？」

茶を勧めてやる隼人。

「子供は、おらぬ。」

「え？」

子供が出来た、結婚する。

だから、ここを取り壊して家を建てるから、早く出て行け、と。そう親戚から聞かされていた隼人。

「……子供なんか居ないわよ。」

「って……。」

申し訳なさそうな顔で、口をつぐむ、隼人。

流産でもしてしまったのだろうか、と考えたのだろう。

無理も無い。

親戚からそう言われ、最初から嘘だった、と頭に浮かぶわけも無いだろう。

ましてや、隼人が。

「アタシがデブだからって妊婦役したら金やるっていわれたのよ！」

女が隼人が煎れてやった茶を苦々しく睨んで言う。

「アンタだって親戚なんでしょ！？ほんつといい迷惑だわ！」

何かをいいかけて、親戚、の言葉に口をつぐむ隼人。

親戚であるから、故に責任を感じざるを得ないのであろう。

本来なら感じる必要の無いものだとしても。

「女。」

「なによ！」

「金をやると言われて手を貸した、同じく加害者である事を忘れるな。」

かつと顔を赤らめてパンツとちやぶ台を叩く。

反動で茶碗が倒れ、良い香りの茶が零れる。

「拭くが良い。布巾がそこにあるであらう。自らが起こした結末の尻も拭えぬくせに怒りの感情だけはおおげさに出せるのか。」

「別にアタシ茶をくれなんていつてないから！」

「問題がずれている。まともに会話も出来ないのであれば理由なときかず、別な方法もある。」

ぽた、ぽた、茶が畳に零れていくのをじっとみるうり嬢。

「自分も被害者だと言うのであるのなら警察で言うが良い。そうしたところで加害者だという事実がかわるわけでもない。」

小さな手のひらで畳を撫でて、隼人の顔を見つめるうり嬢。

そして、それを抱き上げてやり、布巾で水を拭う隼人。

「アタシだって被害者よ！アンタの親戚にデブだの言われて変なことに巻き込まれてさ！そもそもアンタが最初にここに来なければよかったんじゃない！」

「そうすれば金稼ぎの話もなかったことになるが。」

「別にそんなの言われなかったら興味ないし！アンタがここに居座ってるから全部悪いんでしょ！？」

いかに自分が被害者かを、夜中にわめき散らす女。

それを、じつと見る隼人。

彼の膝の上で、ぐつと唇を噛んで下を向いている、うり嬢。

「悪いとは、思ってる。」

沈黙を破るのは隼人。

「でも。」

うり嬢の頭を撫でる、手。

「ここに、居たいんだ。」

俺のワガママだっていうのは、わかってる。

ここに居座りたいって考えて、それでこういつことになって。

口に出して言った後で、言葉が続かない。

「ワガママじゃない。権利だ。隼人、思い違えるな。」

雲野が、言う。

「お前は何一つ悪くない。悪く思うことなど何も無い。間違うな。」

きつぱりと言われて、頷いていいのか、躊躇う。

欲を出さなければ事態は変わっていたんじゃないかって。

「頷け。間違ってない。」

頷いて、顔を上げる。

雲野が、にっと笑っている。

「・・・わかってるわよ！悪かったわよ！」

俺から布巾を奪い取ると、零れた茶を拭く、タクの彼女。

「・・・名前は？」

「は？」

「話するのに、名前がわからない。」

「・・・理佳よ。」

「ありがとう。」

「悪かったって、思ってるわよ。アンタがここに来たからとかじゃないわ。」

ひとしきり拭き終わって、立ち上がり、台所へ向かう、理佳さん。水を絞る音がして、再び戻ってくる。

「素直になれる方が可愛い。隼人に頼んで今夜は泊めて貰うがよい。」

「あ、それはもちろん。部屋はあるから奥に泊まってくといい。」

困ったような、バツが悪そうな顔で、首を振る理佳さん。

「迎えに来ると思えない。なにより、ここに居る方が良いと進言する。」

「・・・わかってるわよ。・・・泊めてもらうわ。」

「奥の部屋使っていないから好きにしてくれて構わない。明日、又話せばいいし。風呂使っなら沸かすし。」

雲野も、理佳さんも風呂入りなおしたいんじゃないかと思って。

膝のうりは、ぐるっとこつちを向いて眠そうにしている。
多分、安心したんじゃないかな。

「いや、我はいい。このまま睡眠をとろう。」

「アタシもいいわ。」

「わかった。それじゃ、また明日。」

ランプを一つ理佳さんに渡すとつりを抱き上げて雲野と隣の部屋へ。

布団につりを先に寝かせてやり、俺も横に入る。

「つり嬢。」

「・・・うー？」

「起こしてしまつてすまなかった。」

「いくちゃ、ねう？」

「うむ。」

袈裟を脱いで着替えながら、うりに声をかける雲野。

「じゃあ、うりももたおさんおしえあげう。」

「ももたおさん、とは？」

眠そうな目をこすりこすり、布団に雲野が来るのを待つ、うり。
それを見て目を細めると、ランプを消して布団に入る雲野。

「お、今日はうりがオハナシしてくれるのか？」

「あいっ！」

「よし、それじゃ電気消すぞー？」

カチツ。

ランプを消して、完全な月と星の明かりだけ。
しーん、と静かな夜。

まるでさっきのことは全て嘘だったかのように、妙に静かだ。

時々微かにカリカリ、とえこがエサを齧る音。

あとは、リリリリ、と虫の声。

石油の臭いは、ここまでは届いてこないのか匂わない。

明日になったら。

警察にいつて、タクの家にいつて。

雲野が録音してくれたのがある・・・って、雲野の念仏、大丈夫
なんだろうか。

「雲野、あの録音してくれたやつ・・・念仏消えちまったんじゃないか？」

「気にするな、また吹き込めばよい。」

「手間かけるな、ごめん。」

「謝るな、好きでやっている事だ。」

そういつて。

「事件がおきるのが好き、と言う訳ではないぞ？」
「わかってるっ。」

そういつて、笑う。

さわさわ、と風の音がして、えこがカリカリとエサを食べている音が止んで。

リリリリ、と虫の声が一層冴え渡る。

秋の夜なんだなあ、なんて思つて、耳に心地よくて。

夏の夜の音とはやっぱり少し違うんだよな。

寂しくなる、つてのもわかるけど、今はほんとに心地よい静けさで。

「ももがながえまいた。」

その静けさのなかにうりの声。どうやら桃太郎はもう始まっているらしい。

「あーちやがたべうと、ももたおが！」

えー・・・正しい話を付け加えようかと思ったが、雲野も桃太郎は知っているだろう。

うんうん、と頷いて、手振りを交えて語るうりの桃太郎に聞き入っている。

「おにー、ね、あめよーってして、めー!」

「ふむふむ。」

「おもたおーはあんこくえよー、って。くまも、あんこねー? きじもって、いぬがわんわんよー?」

・・・うり、お供が増えてるっ!

きじは持っていない、仲間についてくるんだー・・・って、サルはどこいった?

誓えというなら何にだって

「やーとー?」

「隼人、朝だぞ。」

「……んー……。」「

うー……。っと体を伸ばして、目を開けると。

「うわっ!」

目の前にうりと雲野のアップがつ!

二人してじーっと顔を覗きこんで……。あーびっくりしたっ!

「お、おはようっ……。っ?」

「よい朝だ、おはよう。」

「あよーっ」

秋晴れ、と言わんばかりの見事な青空。

空気は澄んで、ほんとにいい朝、って感じた。

そっいえば、理佳さんは……。?

「あ、理佳さんは?」

「先ほど出て行った。朝飯を用意していつてくれたものがある。」

「マジ?悪い事したな。」

「かばちゃ、うまあっ」

「ん?」

よくみてみると、うりの顔になにやら。

「うり嬢がほんの少しかぼちゃを味見してな。」

「いつこ、たべた！」

「うむ。一つずつ食べてみたのだがなかなか旨い。」

雲野もかつ！

しかし、言われて見ると確かにいい匂いがする。
朝起きて飯があるって、ありがたい。

「んじゃ、顔洗っていただくか。お礼言えたらよかったんだけどな。」

「あいやとつ？」

「うんうん、作ってくれたおねーさんにありがとー、ってな？」

う？と首をかしげる、うり。

雲野の袈裟をくいくいつと引つ張ると。

「あいやとつ！」

「ん？」

「いくちゃ、あいやとっ」

「あ、雲野作ってくれたのか？」

ん、と軽く頷くと、どことなく照れたような顔をする雲野。
それを見て、うりがにこーっと笑う。

「丁度材料が余っていたのでな。」

「いくちゃ、がいがいつて、ねー？」

「うむ。うり嬢も手伝ってくれたのだ。」

「うま、ねー？」

二人で顔を見合わせて笑う、雲野とうり。
がいがい・・・って、なんだ？

ひとまず布団を畳んで顔を洗う。

太陽の位置がまだいつもの朝と大して変わらない。理佳さんにしろ、雲野にうりにしろ、えらい早起したんだな。

ひんやりと冷たい井戸水で顔を洗って。

首や肩を伸ばして深呼吸する。

顔を横に向けて、目に入る薪の燃え跡がなければ昨日の事が夢だったんじゃないだろうかとおもっような、いつもとかわらない穏やかな朝。

これから今日の一日の予定を頭の中でぐるっと考える。

きつと、とても大事な、俺達の運命の日。
負けられない、・・・一日になる。

絶対、なんてないって誰か言ってた。

でも。

絶対。

俺、絶対頑張るから。

誓えと言っなら何にだって誓う。

朝

「いくちゃ、こえ、んま！」

「マジうまいっ！雲野料理うまいんだなー？」

理佳さんが作ってくれていたかぼちゃの煮物もすげうまくて、雲野が「がいがい」してくれた物も、これがまたえらいうまくて、

「山芋があつたのでな。それをすり鉢ですって焼いたものだ。」

「すげえ！」

「しゅげえ！」

口の周りをベタベタ（かぼちゃやら山芋やらだな。うん。）にしながらも、満足げなうり。

そんな俺達の様子を見て満足げに頷く雲野。

「喜んでいただいて何よりだ。」

「いや、ほんとありがたいっ！」

「いがちゃー」

「では。」

一口、口に入れると、そういつて黙る雲野。

ん？と俺とうりで雲野が口の中のものを飲み込んで言う続きを待つ。

ゆっくりと咀嚼して、目を閉じ。

「うむ、旨い。」

そして、目を開くと。

「全て片付いたら、我が腕を振るおうぞ。」

「おお！」

「おおおお！」

そういつて、にっと笑う。

いつもの、「我を信じる。」という時の笑顔で、

「これから、タクがババアを連れて来る。こちらから出向く手間が省けたというものだ。」

そういつて、ずずっとこれまた上品に味噌汁をすする。

一瞬たじろぎそうになった体が、彼の笑顔と、

「う！」

と俺の裾をつかんでいるうりの笑顔に力づけられる。
さつき、誓ったばかりだ。

「おう、期待してるぜっ！！」

「うむ。我を。」

「信じてるぜ！」

「あいっ！」

うまい朝飯はかぼちゃのひとかけらも残らず完食。
食後には俺が入れた茶。

落ち着いたら食器をもうちよつと揃えてもいいな、なんて思つて。

居間から眺める外。

そこに止まる、不似合いな高級車。

「来たな。」

「うり、俺の膝の上にいるんだぞ。」

「あい！」

ガチャ、と音を立ててドアが閉まる。

そこから降りてくるのは、ババアと、タク。

それを見て立ち上がる雲野。

居間から庭へ出る。

「雲野？」

「いや、ヤツの車の窓に仕掛けてあるんでな、そろそろ回収してもいいだろう。」

「あ、そうか！」

ゲタを履いて、スタスタと歩いていく雲野。

その姿をじつと見るうり。

食器を台所に運んでちゃぶ台の上を片付ける。

ババアとタク

「入るわよ。」

「どうぞ。」

ちらり、と土間を見て顔をしかめるババア。

「スリッパ無い訳？」

「ありません。そのままどうぞ。」

汚いものを見るかのように顔をしかめると居間へと上がるババアとタク。

そして、戻ってきた雲野。

「わかってると思うけど。」

口を開いたのはババア。

すぐ側に無言で座るタク。

一言、謝ってくれて、話ができるのだろうか。

俺の隣に座り込む雲野。

俺の膝の上には、うり。

ババアの言葉の続きを待って黙り込む。

「写真なんか、証拠にならないからね。」

ババアの言葉に、一瞬、思考が止まる。

「言いがかりもいい加減にしてくれるかしら。侮辱罪、って知ってるわよね？」

「全く、人が様子を見に行っただけでびっくりさせられて迷惑だっつーの。」

口々に言う、ババアとタク。

想像もしていなかった展開に、びっくりして。

・・・とはいえ、黙ってるわけにはいかない。

「それならばこれから警察に行きましょう。放火って、罪ですよね？」

ふん、と鼻で笑うババア。

「様子を見に灯油持参でいきなり裏の薪に火をつけるのが様子を見にいくということであるのか。妊婦と偽らせて連れてきた女性を夜に置き去りにして、な。」

「は？バカじゃねーの、何テキトーこいてんだよ。」

雲野の言葉に強気で言うタクに。

「気の毒に。程よい馬鹿であれば可愛げもあるが、二十歳過ぎてもここまでは先が暗いな。」

そういつて、俺に向き直り、言う。

「隼人、情け等必要は無いであろう。証拠なら我が揃えてある。車中の会話に、昨日の写真に、今朝焼け跡も取ってある。中に人が

いることを知った上での放火である事だしな。」

「ちよつと、会話つてなによ!!」

「ふざけた事言つてんじゃねえぞ!ぶつ殺すぞこの野郎!!」

キュルル・・・ガチャリ。

——「ちよつと、会話つてなによ!!」

「ふざけた事言つてんじゃねえぞ!ぶつ殺すぞこの野郎!!」

雲野が手にした機械から、流れる会話。

「他の分まで聞かせてやる義理は無い。昨日あの時点で一度。そして、今で二度。我は仏ではないのだ。三度目は無い。」

「雲野、さんきゅ。」

俺の膝の上のうりは、ぎゅっと俺の手を握っていてくれる。その目に涙は、無い。

「ああ!?!この場でぶつ殺してやつてもいいんだぜ!?!」

「どこまでも愚かよな。」

「ふざけてんじゃねえ!」

ガタツ!

立ち上がって雲野を見下ろすタク。

そして、

「昨日あのまま焼け死んじまえば良かったんだよこのカス!!」

怒鳴りながら、雲野に蹴りを入れる。

バタンッ！

「言っておくが、正当防衛だ。」

倒れたのは、タク。

座ったままの雲野。

何が起きたのか、と目を丸くするババア。

もう一度だけ

「雲野・・・っ!？」

「知らなかったか。我は少々武芸をたしなんでおつてな。我が家では道場も。」

向き直る顔には余裕の笑み。

びつくりして口も聞けなくなつたのか、体を起こすもぽかんと口を開いたままのタク。

「これで、三度。隼人、すまないがうり嬢を連れて警察に行つて来てもらえるか？」

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ!」

「断る。話の出来ぬ相手に語る言葉を持たぬものでな。」

「待てよ!!」

「わ、わかつたわよ!!遺産は返すわよ!」

立ち上がりかけた俺に言う、ババア。

無言で俺を見ている雲野と、うり。

このまま、警察にいつて全て任せるか、今のババアの話聞くか。

「ふざけんなよ!調子乗ってんじゃねえぞ隼人!」

一瞬の静けさを破るタクの声。

「わかつた。雲野、ここ任せていいか？」

「ちよつと待てよ!!」

「無論。」

「待てって言ってんだよ!!・・・ああ!？」

「それじゃ、行つて来る。うり、おいで。」

うりを抱き上げる。

・・・育ててもらった、住まわせてもらった、親戚。

頭にぐるぐる回る記憶は、けして良いものばかりじゃない。

「隼人！わかったわよ！遺産は返すわ、この家も好きにきなさいよ！その分はさっぴかせてもらっから、それでいいんでしょ!？」

できれば、穩便にすませられたら、と思っていた。
ただ、タクが放火までするとは思わなくて。

「これからすぐにでも持つてくるわよ！お金ならすぐに振り込むわ！」

どうしたら、と、躊躇つて。

俺の腕にしがみついたうりの手がひんやりしていて。

「隼人。」

急かす様にじゃない。

雲野が、じつと俺をみて、名を呼ぶ。

「・・・。」

育ててもらった、住ませて貰った。
放火に来たタク。

いつか危険になるかもしれない。

でも、住ませて貰った。

「雲野、俺。」

口を開く。

無言で俺を見る、雲野。
ぐっと見上げる、うり。

俺は・・・。

「・・・もう一度だけ、信じていいかな。」

果汁100パーセント

「雲野、ごめん。」

「どうした？」

「せつかくしてくれたのに……。」

そういつと、ぽんつと俺の頭を軽く叩く、雲野。

「お前が望むのならそれでいい。そのために我が居る。」

そういつて、笑ってくれる。

「正直、不安が無い訳じゃないけど、どうしても、踏み切れなくて、ごめん。」

「案ずるな。タクは是非にと我が家にいくそうだ。」

「……って、え？」

二人を見送るから、とタクとババアを送っていった雲野。

俺には、うり嬢とここにいてくれ、と言って一人で。

もしかしたら、怒らせてしまったのではないだろうかと不安にもなったり、やっぱり、間違っていたんじゃないかとあれこれ思い悩んで。

30分程して戻ってきた雲野が、

「さて。茶が飲みたいな、隼人、頼む。」

と笑って言ってくれた事にほっとして、俺が入れた茶を旨そうに飲むと。

続きを待つ俺をみて、ん？と笑う雲野。

「我が家で、世話になりたいと言つものでな。頭を下げられては断るのも気の毒ゆえ。」

「頭さげ・・・マジ！？」

「うむ。まあ、二人がかりで頼まれてはな。」

「え、いや、あのっ・・・？」

タクが頭下げて？ババアも？
雲野の家に・・・？何でだ？

考え込む俺を見て、にっと笑う雲野。

「人として自己を見つめなおしてみたくなつたのであろう。朝から晩まで面倒見てくれる。案ずるな。」

「タ、タクがか・・・。」

「あやとー、じゅすあげうー？」

違和感があったりでつい、握ったままの空の俺のコップをみて、うりが自分のを俺に差し出してくれる。

飲み足りないと思つたんだろう。

「いや、大丈夫だぞー、ありがとなっ？」

「あいっ！」

「・・・ん？」

「うり、おかあり♪」

「はいはい、まっつてなー？」

台所へうりのジュースを取りに行く。

これで、全部落ち着いた・・・ってことなのかな。
今日午後にも銀行行って、確認して。

そして、俺はここにいても、いい・・・。

どうしても、本当の事なのかって、実感がなくて。
手に取ったうりのりんごジュースをじっと見つめる。

果汁100パーセント。

うん、100パーセント。

・・・って、そうじゃなくて。

俺は、ここにいても、いい。

午後銀行確認して、無事入ってたら、もう、心配は・・・ない。

それで、いいんだよな・・・？

ほんとに、俺は、ここに居られて、このまま毎日を過ごせるんだ
よな・・・？

涼しい土間で程よく冷えたジュース。

冷蔵庫なり色々買わないとなー、なんてうりと話してた。
でも、不安はあって。

考えて、幸せな毎日を思い浮かべるたびに、本当にそれは俺の未
来になってくれるのかって。

幸せ、な未来を思うたび、出てくる不安。

それが、・・・解消された？

・・・本当に？

「あ。」

そうだ、これをもって行ってやらないと。
ひんやりとしている空気に我に返る。

俺は潔白なんだっ！

「おまたせ、うり、もってきたぞー？」

「いやとっ」

「では、一休みしたら銀行に行こうな。」

「あ、バアちゃんとも行きたい。」

「うりも！」

「我も。」

雲罨にむかつてにこーっと笑ううりと、パチン、と片目を閉じてにっと笑ってみせる、雲罨。

「ん？何か話してたのか？」

二人の様子に、なんとなく尋ねてみると。

「いや、うり嬢に世の中の真理について語っていたのだ。」

「おにたいじ、わういの、めー！」

「うむ。うり嬢は実に聡明だな。」

——「うり嬢、案ずる事はないぞ。今後何かしら不安がないとも言
い切れないのでな、タクとやらには先ほど我が一言話をしておいた
のだ。」

「う？」

「いづれまた悪しき事を企むやもしれんのでな？」

「あしき？」

「悪い事、そう、悪い人、だな。証拠はあるが、何かあつては困るのでな。我の家で毎日住み込みで精進するか隼人に全て委ねて事件として調書をとっておくか……まあ、その場合、もっと厳しい条件になるであろうが。」

まあ、早朝から夜中までみつちりと本堂の掃除やら神事の手伝いに修行。

前科がつかない分良いであろうが、……精進せい。

「いくちゃ、わういの、めつて？」

「うむ。我の家で住み込みで精進なら極僅かにと伝えてある賃金もですよ。馬鹿だとは思っていたが、そういう類の人種が好きな男が我の家にはおるのでな。彼はなかなか素晴らしい師匠だ。」

「ししょ？」

「うむ。黒帯所持の、文武両道をこよなく愛する男だ。」

「ぶつぶりよろー？」

「うむ。」

口の聞き方、礼儀作法から教わる事になるのであろうな。さぞかし鍛え甲斐のある事だろう、喜ぶ顔が目に見えかぶ。

「なんだ？雲野、どうした？」

「いや、なんでもない。とりあえず銀行を確認すればひと段落つくものよな、と安心して笑みを浮かべていただけだ。」

「そ、そうなのか？」

「うむ。隼人、今後不安はない。」

そういう雲野に、納得する。

彼がそういうのなら、大丈夫なんだろう。

しかし、・・・雲野の家に、是非にとタクが・・・？

「ほんとに、タクが世話になるって、迷惑かけないのか？」

「うむ。問題ない。」

「そ、そうか。・・・じゃあ、後で食器三人分と、まとめて買いに行こうな？」

「あいつ」

「うむ。」

・・・あ、そっか、部屋のこともしないと。

「どうした？」

ふと思い出して黙る俺に、声を掛ける雲野（に肩車されているうり）。

嬉しそうに頭をぺちぺち・・・いいのか？

「いや、部屋の事も電話するなりしておかないと、って思い出して。」

「ああ、それなら我が家に世話になりにくるついでに荷物の発送なりもしてくれるそうだ。」

「タクが！？」

「うむ。修行はそこからはじまるのだ。」

「・・・そ、そうか。」

「うむ。如何わしい本等おいてあるのか？」

「い、いやっ！そ、そういう訳じゃないけどさっ！？」

「いじゃじゃあしー？」

うり、つつこむなっ！

「成人男性として恥じる事ではないが、特殊な趣味の本でも？」
「と、特殊ってっ！？」

「いや、そういう物を片付けさせるのに抵抗があるのかと案じてな。」

「断じて違うっ！ないっ！・・・はず・・・で・・・すっ・・・？」

「語尾に迷いが感じられるが。」

「あやと？」

う？と小首をかしげて俺を見る、うり。

ああつ、そんな目でみないでくれっ！俺は無実だし問題ないっ！
特殊な趣味なんてないし、成人男性として本の一冊位は・・・

！！！！

まてっ！

確かバイト先の先輩が・・・いや、あれは返したはず、返したはず・・・うん、返した。間違いないっ。

「安心した笑み、というやつだな？」

「あやと、よかったねー？」

「うん。・・・ってっ！」

そんな俺を見てにやりつと笑う雲野と、雲野の頭越しに俺を撫で
てくれる、うり。

うり、信じてくれ、俺は潔白なんだっ！

ありがとう。

「・・・振り込まれてる。」

「良かったな、隼人。」

「ねー？」

必死で誤解を解いて、昼飯を食って。

買い物がてら口座を確認して、振り込まれていた金額に安心する。

「数日後にはあの家の権利書も送られてくるはずだ。」

「雲野、ほんとありがとうなっ。」

「いやなに。しばらく世話になるつもりだからな？」

「ずっと居てくれよっ。」

「いくちゃ、ずっといしょー！」

「望んでくれる限り、一緒だ。」

それなら、ずっとだな、なんてうりと言いついて。

天気はいいし、空気は澄んで気持ちいい。

今までずっと悩んでいた事も、全てうまくいったんだ、って実感がぐわつと沸いてきて。

雲野とうりの顔をみては、顔がにやけて。

「今夜の夕食は、我が腕を振るおう。期待していてくれ。」

なんて嬉しい申し出に、もったまらなくて。

今日はこれから買い物をして、バアちゃんここにいて。

忙しくなるなー、なんて、一つ一つが嬉しい出来事で。

みつつ、大ききの違っおそろいのコップを買ったり、タオルを揃えたり。

初めて俺が東京にでて、一人暮らしをする事になったときの気分と、こんなにも、違っ。

安心して、幸せで。

世界がほんとに穏やかで。

左には、ぎゅっとひんやりした手をつないでくれる、うりがいて。右には、にっとなんて笑ってくれる、雲野がいて。

ジイちゃん、とーちゃん、かーちゃん。

俺、幸せだ。

ほんとに、ありがとう。

俺を産んでくれた事。

雲野に出会わせてくれた事。

そして、うりに出会わせてくれた事。

——ありがとう。

いつか。

「アカネー！ホラ、じつと！」
「あー！」

一面の夕焼け。
空を飛ぶ、たくさんのトンボ。

それに、小さな手を伸ばして、トンボが止まるのをじつとまつ。

「瑠璃様、ほら、トンボとまった！」

坊主頭の少年が和服の幼女に指先に止まったトンボを見せる。
幼女が嬉しそうに微笑んで、触れないように、触れないようにと
そつと手を伸ばす。

「ケンタあ！ずるい！」
「なーにがずるいもんかあ、・・・あ！コウモリだ！」
「うそだあ！」
「うそなもんあるけ！みてみ、ほら！」

見上げた頭上には、小さな影。
翼を広げて、森へと飛んで行くのが見える。

「それじゃ暗くなってきたし、かえろっけえ？」
「んだ。瑠璃様、いこ？」

こくつと頷いて、二人と手をつなぎ、山道を歩き出す。

一面の夕焼けに、辺りまでもが紅をさしたように、赤い。

「明日は川さ、いこうな！」

「スイカもっていくけ？」

「にぎりめし作ってもらってっ！」

アカネと、ケンタのつないだ手が、じんわりと暖かい。

夕方に吹く風が少しずつ冷たくなって、秋の訪れを感じさせる。

「したつけ、ケンタあ、瑠璃様、又明日ねえ？」

「おー、又明日なあ！」

にっこり笑って手を振る、和服の幼女。

いつか、又明日と手を振って、明日を待つ日が遠くなる。

それでも、もう、会えないなんて、思わない。

きっと、また、必ずどこかで逢えるから。

必ず、逢えるから。

「あらあ、バアちゃんもつりちゃんもお昼寝しちゃってるねえ？」
「いい夢みてるんだ、きつと。笑ってるし。」
「うむ。見るからに幸せそうだ。」

夕方の中ごろ。

もうちよつとしたら、日が暮れる、その手前。
いっぱい話して、喜んでくれて。

雲野と俺と、ミヨコさんで畑に出かけて、お土産もらって。

見上げた空には赤とんぼ。

綺麗な赤い背が、夕焼けに混ざっていくみたいで、思わず目を細める。

「バアちゃん、風邪ひくよう？」

ミヨコさんが、二人に声を掛け、ゆすって起こす。

「んー・・・ああ、バアちゃん居眠りしてたねえ？」

「いい夢みてた？」

「うんー、どんな夢だったかねえ、でも、なんだか幸せだねえ。」

「目覚める前にみた幸せな夢は正夢と言うから、いいことあるでしょう。」

うんうん、と頷く雲野。

「そうなのか、いいこと聞いた。」

「我がそうであるからな。間違いない。」

「あー」

体を伸ばして、んーっとしながら、俺に手を伸ばすうり。

にこにこしながら、寝起きって、いいな。

「よーしよし、それじゃ、かえろうなー？」

うりをぎゅっと抱き上げてやる。

「うむ。そろそろ失礼致します。又、明日に。」

「それじゃ、バアちゃん、ミヨコさん、ありがと！又明日っ！」

「まちゃーしたー！」

「はいよう、又、明日ねえ。」

「また明日ねえー。」

また、明日。

これからも、ずっと、一緒にいるから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1687b/>

うりと夏休み～続編～

2010年10月15日00時24分発行